

いしかり 暦

- 「石狩川鮭漁」の図瞥見 ……………吉岡 玉吉… 1
- 明治九年石狩町大火と市街地の形成 ……………工藤 義衛… 9
- 石狩尚古社社員
井上伝蔵と土方常吉、中島源五郎の俳句 ……………鈴木トミエ…19
- 「図書にみる石狩鍋(サケなべ)材料の変換」によせて
……………鈴木トミエ・田中 實・秋山 正子・高瀬 たみ
仲野 孝・三島 照子・安井 澄子・吉本 愛子…28
- 石狩浜、厚田浜の履物 ……………吉岡 玉吉…32
- 村山家文書解説
北海道開拓記念館収蔵「イシカリ川借證文之事」 ……村山 耀一…37
- 石狩市(旧)の小・中学・高校校誌等略目録(未定稿)
……………田中 實・村山 耀一…42
- 石狩市(旧)の小・中学校唱歌(未定稿) ……田中 實・村山 耀一…46

第 22 号

2009. 3

石 狩 市 郷 土 研 究 会

「石狩川鮭漁」の図瞥見

吉岡玉吉

以下に述べるのは、北海道大学フィールド科学センター植物園所蔵「石狩川鮭漁」の図(図1)を石狩川河口鮭漁に携わった元漁師の目で見たものである。そのため、漁業史の専門家から見ると異なる見解があるかもしれない。あくまでも石狩の鮭漁に携わった者の解釈としてご理解いただきたい。

一・全体の構成と遠景

この絵を見ると石狩川河口の風景を背景に、海浜での鮭地曳網漁が描かれているように感じた。その理由は後で述べる。最初に遠景について述べ、次に近景について触れる。

遠景に描かれた山並みは、左岸の本町地区からの風景が描かれている模様。山間は樺戸山地のピンネシリ(一一〇〇メートル)を中心に右に待根山(一〇〇二メートル)・隈根尻山(九七一メートル)左に神居尻山(九四八メートル)と思われる。(図1)

遠景中央の船3隻は、川右岸来札(ライサツ)の漁場。左岸の三半船3、磯舟1(注1)があるのは、左岸のトクビタ(注2)にあった漁場で、堀神威(ホリカムイ)付近(現本町地区仲町付近)ではないか。河岸から少し上がったところに榎木のようなものが茂っている。右岸側はカシワだろうが、左岸側の河口近くにカシワ林はない。ヤナギかハマナスだろうか。

遠景中央に帆前船2隻見えるのは石狩川河口と思う。従って手前が上流。上段は鳥瞰図の様に見える。



図1 「石狩川鮭漁」の図

二・所謂河川地引網漁の様子。

下段絵・近景は、海浜漁の様子と史料する。二つに区切って摘要を述べる。

①右絵。画面向かって右側部分。

地曳網が手繰り上がり。大網を清め(さやめ・ここでは鮭の選別作業)、漁夫が板倉(塩切場)に運ぶ様子。(図2) その左側では一人の漁夫が左手で網を清り(きより・修繕)している。三半船の艫では、船頭らしい人が艫櫂を立てて持っている。(注3)

高い四角中の柱には、一面に「札幌縣廳七里石狩國石狩郡石狩驛」もう一面には「篠路驛江三里式拾壹町 錢函驛江五里拾町」とある。駅通の標柱である。

この標柱を挟んで一人は鮭を顔に当て、他の一人は歌舞伎役者のように手を振っている素振り、鮭の大漁を喜んでいる漁夫の姿と作業の様子が表現されたものと思われる。とごろを巻いているように見えるのは、引き網の入網か。ただし、河川漁の入網は、ふつう七〇尋(一〇五メートル)で、描かれている網は長すぎる。(注4) 手前に帽子を被り棒を持っている人物は羅卒(明治時代の警察官)。海辺に手を広げ、磯舟の前に二人立っている人は服装からアイヌと史料する。

②左絵。網を引いている図

携わっているのは漁夫十一人。良く描かれているようには思うが、網の左右の人数がほぼ同数となっている。実際は網の上部(アバナ)は軽く、網の下部(アシタナ)が重い。(錘がついている)そのため下部に多くの人数がつく。(注5) 地曳網は、中央(袋網の入口)にある「神威浮子(カモイダンブ)」から右側を入網(いりあみ)、左側を出網(であみ)という。その先端につくのが入網側は入網(いりづな)、出網側を出網(でづな)という。(図3) この絵は入網を手繰っているところと思うが、網は川の中で途切れどこ

にも繋がっていない。網の先にいる磯舟の一人が、水中に手を入れて、網の引き具合を見ているのか、袋網の状態も見ているのか。(図5) あるいは、神威浮子を引き上げて袋網に鮭を入れようとしているのかもしれない。磯舟の前が白くなっており、網に入った鮭がはねている様子を表現しているのだろう。

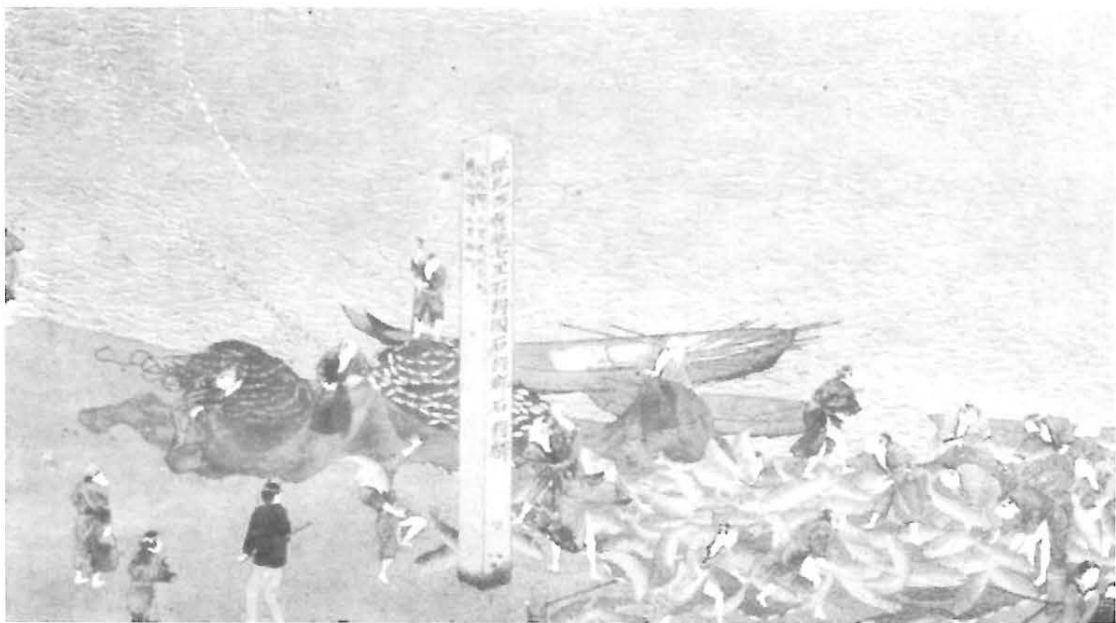


図2 鮭の清り(選別)

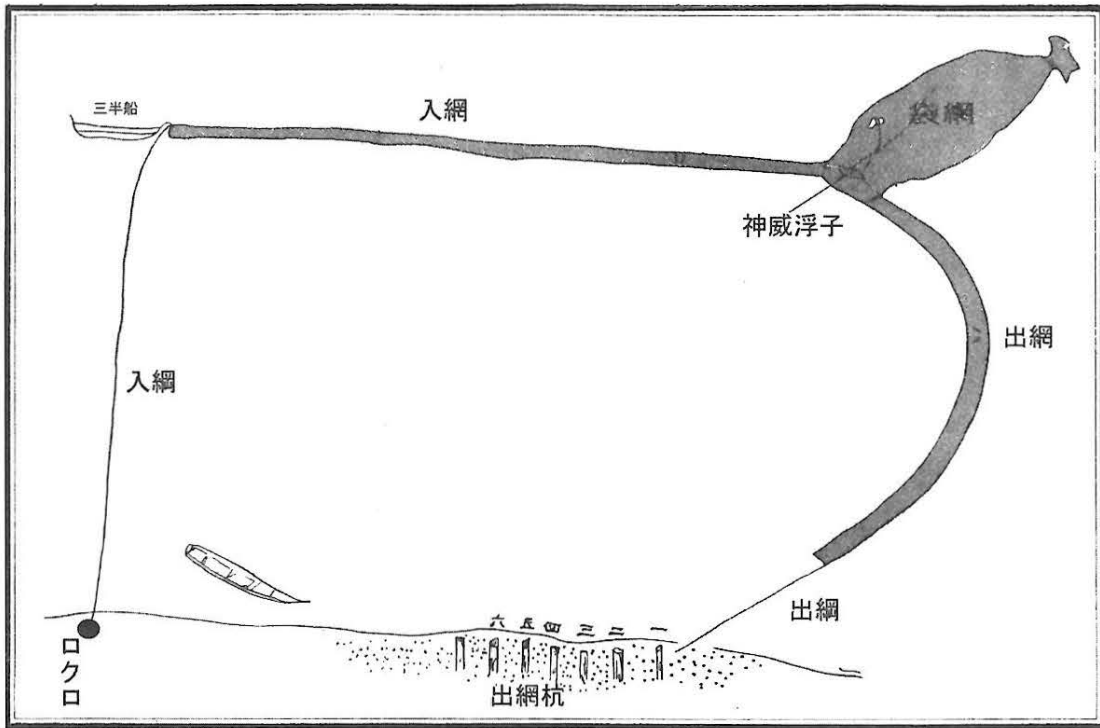


図3 河川での地曳網漁（北海道水産協会編1935を改変）

しかし、この磯舟から出た入網は、この絵の網にはつながらず、岸向かって消えている。網につながつていけば、地曳網の最後の段階の絵になるのだが。その左側に描かれているのは全く別な動作で、引き上げられた網を整理している様子である。（図4）ただし、これも河川漁としては網が長すぎる。また、河川漁の場合、一日に十三〜十五回（回）も引き網をするので、網を引いたそばから船に積んで、次の漁の準備をする。絵にあるように陸で網を山にしているのは、網が長く漁の回数が少ない海浜漁の様子ではないか。

③入網をロクロで巻いている図
 網掛船（三半船）で沖合に網をかけ、ロクロ（注6）で巻いている。十人いるが、河川漁としては多い。網が短い河川漁では六〜七人で充分。（図6）

ロクロの横で一人の漁夫がロープを手繰っているが、これは捨て取りという。ロクロに二〜三廻りしてロープを掛けているが、一人専門にロープを手繰る捨て取りがいなければタップ網は上がってこない。網は、磯舟につながり、さらに磯舟から岸につながっている。



図4 浮子手網（アバタチ）



図5 神威浮子（カムイダンプ）



図6 ロクロでの巻き取り



図7 舟の鱧襦

実際の作業を良く見て描かれている。

ロクロ左の二隻の船(三平船)は網掛け船。長い棒状のものは手櫂。十二人ノ十四人で掻く。二隻の船の鱧は夫々、一本の棒が立っているが、先端に「ウタ」(櫂の握りの部分)がついていて固定しているから櫂と思われる。状況から船が動揺しないように立て固定しているように見えるが、自分の経験ではこのようにすることは出来ない。(図7)また、船が川に上げられているが、川であれば、このようにすることは出来ない。船の碇を下ろして泊めるだけである。岸に上げるのは海浜でのやり方に見える。

鮭漁は九月ノ十月ノ十二月であり、カモメがこのように高上がりすることは出来ない。ニシン漁期には(四月ノ五月)には高上がりする。その時は時化。

鮭を釣っている人がいるが石狩浜(川面)は産卵に遡上するので餌はとらない。従って、他の海域では昔から釣れるが石狩浜では釣れない。(図8)

戦後、進駐軍の将

校が石狩にヨットハーバーを作った。自分は警備補助員という名称で、米軍将校についたが、この将校は、鮭を釣ろうとした。自分は絶対釣れないと忠告したが、「俺はミシシッピー川で鮭を釣った。(だから石狩でも釣れる)」と聞かなかつた。やはり一匹も釣れなかつた。絵はウグイではないか。画面中央に、釣竿を持った子供が描かれているが、連れの子供は桶をもっており、これはウグイでよいだろう。でも、先の絵は鮭である。あるいは未成熟のサケかも知れない。荷を担ぎコウモリ傘を持って

いるのは旅行者か行商か。行商にしては荷物が少ない。右側に毛皮の胴着のようなものを着た鬻を結っている男が見える。



図8 鮭を釣る人



図9 鬻のある人物

漁の監督だろうか。その他にも鬚を結っているように見える人物が何人もいる。散髪脱刀令は、明治四年発布で、明治十年代になっても鬚のある人がいたのだろうか。(図9)

④ 川中の漁

川中に何艘も船が描かれているが、それぞれ異なった作業をしているように見える。(図10)

ア 画面右側端の三半船は、網掛(網を仕掛けること)をしていると思われる。地曳網をおこなう際、網の一方から出た網を岸に打った杭(出網杭)に固定し、出網、袋網、入網の順に網を張る。この三判船の後が少し白く波立っているが、これは、岸につながった網を引っ張っているものと見られる。

イ 次の磯船には、駆通の標柱付近から網が出て、ロク口につながっている。磯船の場所に袋網があるのだろう。岸につなげる出網は、網を巻き取るにしたがってロク口に近い位置を変えてゆく。イの網掛の次の段階の状態である。

ウ ロク口の右側には、網を引いている様子が描かれている。地曳網の最後の段階である。ただし、既に書いたが、この網は出網側が磯舟にもどこにもつながっていないおかしな状態である。岸に立っている人物が、両手を上げて川に向かって何か叫んでいるように見える。こうした作業は見たことがない。岸上がつてくる鮭を網に向かって追い返しているのだろうか。

三・「石狩川鮭漁」の図の虚実

全体として見ると、一枚の絵で網掛、曳網の一連の作業を描いてあり大変貴重なもの。個々の作業についても良く理解して描けている。しかし、絵なるが故に若干誇張があると思う。

① 網の数

絵の中には、網掛、網引きなど異なる作業をする網が3本描かれ

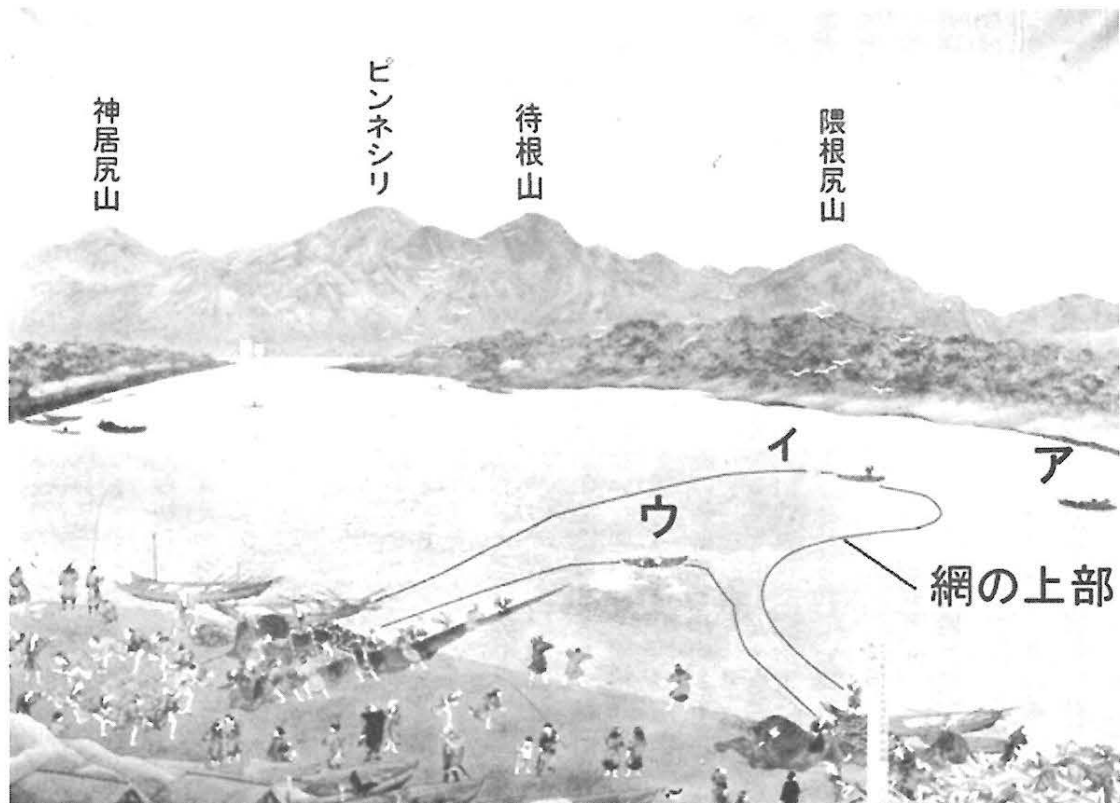


図10

ているが1ヶ所の漁場で、同時にこのような作業をすることはない。一連の作業を示すための演出だろう。

②網の規模

最初に見たときに海浜漁の様子が描かれているのではないかとの印象を持った。描かれている網が河川漁としては長すぎるし、片付け方もおかしい。ロクロを十人で回しているが、河川漁としては多い。三半船のつなぎ方の海でのやり方である。海浜で行う大網の様子を川漁として描いているように見える。

四・おわりに

以上、石狩の漁業者の目で「石狩川鮭漁」の図を見てきた。これまで述べたようにこの絵は、ありのままの様子を描いた単なる風景画ではなく、鮭漁のさまざまな様子をひとつの画面に書き込んだもののようなのである。作者は、個々の作業内容だけでなく、全体にどのような手順で地曳網が行われるのかを理解して描いている。おそらく実際に鮭漁中の石狩に滞在して鮭漁を調べた上で、描いたものである。しかし、一部に海での地曳網の様子を河川漁のものとして描いている部分が見られる。

解説「石狩川鮭漁」の図について

「石狩川鮭漁」の図は、明治初期の石狩川河口における鮭漁の様子を描写した絵で、石狩市の観光ポスターにも用いられるなど比較的良く知られている。大きさは、縦百三十一センチ幅百七十一センチ。作者や製作年などの記録は残っていない。

戦前から北海道史研究者には、明治初期の鮭漁の様子を描写した絵として知られ、北海道庁道史編纂主任だった竹内運平の『北海道史要』に「石狩川鮭漁之図 札幌博物館所蔵」として紹介されている。(注9) 続いて『新撰北海道史』第一巻でも「石狩川口辺の鮭漁」と

して掲載されている。(注10)

この絵の製作年などに関する記録は残っていないが、画面右下に描かれた標柱に「距札幌縣庁七里石狩國石狩郡石狩驛」と書かれており、明治十五(一八八二)年から明治十九(一八八六)年までの、いわゆる三県一局時代に完成したものと考えられる。

作者は、未詳とされているが、北海道大学が所蔵する「北海道後志国高島郡漁場全図」と描かれた時期、大きさがほぼ同じで、内容的にも鮭漁と鮭漁という対になるものであるため、同一の作者による作品である可能性がある。

この「北海道後志国高島郡漁場全図」の作者は、北海道開拓使の画工、栗田鉄馬とされている。(注11)

栗田鉄馬は、天保九(一八三八)年生、大正六(一九一七)年没。香仙と号した。会津に生まれ、戊辰戦争後「会津降伏人」として小樽に移住した。その後、余市郡に転じた後、明治十一年九月開拓使札幌本庁民事局勸業課の画工として採用された。栗田がいつまで開拓使に在職していたのかははっきりしていない。栗田は、明治二十年代から三十年代にかけてアイヌや札幌神社を題材とした石版画の原画を描いたことでも知られている。また太子流の剣術家としても知られ、新撰組の永倉新八郎と交友もあった。(注12)

近年の研究により、開拓使時代の栗田鉄馬は、明治十三年に厚田の樺太アイヌの漁業の様子を模写するよう命じられていた可能性が高いことが分っている。(注13)

厚田のアイヌの鮭漁を描いた版画(注14)の存在は、これまで研究者間で知られていたが、改めてこの版画と栗田鉄馬との関係を検討しなければならぬであろう。

栗田の画風は、大きく分けて二通りある。「北海道土人会話」(注14)などに見られるような線の太い版画と「官幣中社札幌神社神輿市街巡幸之図」(注15)に代表される日本画を基礎にした細密な画風

である。この二つの画風は、一見、同一人物の作品とは思えないほど全く異なる。前者は、先の厚田のアイヌ鯨漁の版画と共通点が多く、後者の画風は、石狩川鮭漁の図に近い。

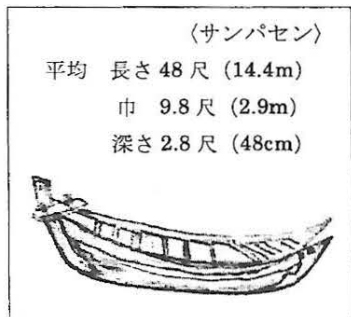
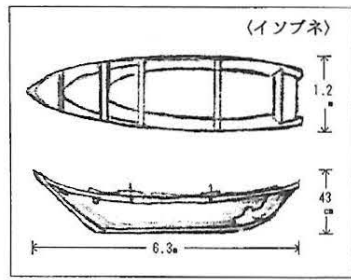
明治二十年台以降の作品の特定も進められているが、開拓使時代の画業の特定は難しく今後の課題となっている。(注16)

北海道大学北方圏フィールド科学センター植物園及び同佐藤克学芸員には、資料の検索、使用について便宜をはかっていただきました。また、後藤優美子氏には、栗田鉄馬についてご教示いただきました。心より感謝を申し上げます。

(工藤義衛)

注1 磯舟(イソブネ)と三半船(サンパセン) 吉岡玉吉 二〇〇三 北海道

日本海漁業漁具用語事典より



注2 トクピタラ(トクピタ・徳鑑) 新しく出来た川原。永田方正 一八九

一 北海道蝦夷語地名解

注3 清り。「キヨル」「キュル」「キヨリ」とも発音していた。網を修繕するの意。語源は清める。網がやぶれた場合、網針又はアンゾ(糸)をもつて修理する作業の意である。なお大きくやぶれた場合、同目の網を用い

てタンボを入れるという

サヤメル【清める】整理する、処理するの意。語源は、「さやむ」(けがれを去る、きよめる)という語があり、これが転訛したものではないかと思料する。延縄漁や刺網漁から帰り、延縄又は刺網を整理することを「サヤメル」と言う。道南地方で多く使われているが、西海岸はもとより全道一円の海岸で使用されている海岸方言である。

注4

大網は、海浜漁と河川漁では規模が異なる。
・海浜漁。長さ一五〇〇尋(一尋五尺・二二五〇メートル)。一日大漁の時は一河(ヒトカワ・一回の意)、普通二河。一場所二ヶ統(一ヶ統一〇〇〜一三〇人)地曳網または引き網ともいう。(このころ浜では引き網と呼ぶ)

注5

・河内地曳網(引き網)。長さ一五〇尋(二二八メートル)。一日十三河〜十五河。一場所二ヶ統(二ヶ統五〇人位、昭和に入り三〇人前後)
アシタナ【沈子手網】漁網の下縁部分の手網(タナ)のこと。広辞苑では沈子(いわ)を付ける方を脚網端(あしあば)と記述しているが、石狩浜などの西海岸では沈子手網、又は脚網と記述している。呼称は、単に「アシ」と言う。

注6

アバタナ【浮子手網】漁網の上縁部分の手網(タナ)のこと。辞書は浮網端と記述されているが、石狩浜や周辺海岸では浮子手網と書き、呼称は単に「アバ」「ウワタナ」「タナ」と言っていた。
ロクロ 具(ステ取り)。石狩浜では石狩川のサケ地曳網場で昭和十年(一九三五年)頃まで、この本器を用いて平常は六人、増水時には八人、一〇人で、沈子手網(アシタナ)係が「バイキー」(後退する、反対回りをする)と声を張り上げながら作業していた。

注9

竹内運平 一九三三 『北海道史要』 市立函館図書館学術叢刊第2巻

注10

北海道 一九三七 『新撰北海道史』第一巻 第三七図

注11

北海道開拓記念館 二〇〇二 『描かれた北海道』 第54回特別展図録

注12 三浦泰之 二〇〇六 「開拓使に雇われた「画工」に関する基礎的な研究」『北海道開拓記念館研究紀要第1』34号

注13 注12前掲書

注14 「石狩国厚田郡厚田村旧樺太アイヌ鯨漁業之図」「石狩国厚田郡厚田村旧樺太アイヌ鯨乾場之図」いずれも個人蔵 写真が北海道大学附属図書館に所蔵されている。請求番号A(a)144及びA(a)145

注15 河野本道編 一九八〇 『アイヌ史料集』第4巻言語・風俗編

注16 北海道開拓記念館蔵

引用・参考文献

北海道水産協会編 一九三五 北海道漁業志稿

吉岡玉吉 二〇〇七 「石狩川河口に於けるサケ地曳網漁回顧」『いしかり暦第20号』

明治九年石狩町大火と市街地の形成

工藤義衛

はじめに

- 一・明治九年五月の石狩町大火の経過
- 二・区画整理の経緯
- 三・町並みの変遷
- 四・「石狩市中図」と「建家調」
おわりに

はじめに

明治九年五月の石狩町大火は、親船町を中心に本町市街の大部分が焼失し、家屋百九十六戸、板蔵三十三棟、仮病院、曹源寺、旧運上屋（本陣）などが失われた明治期屈指の大火災として知られている。この大火について石狩町誌は、市街地が測量され、道路幅が八間に統一される契機にもなったと指摘している。（注1）
ここでは、開拓使文書から明治九年石狩町大火の経過をたどるとともに、火災後に市街地に測量が入り、町並みが整えられる過程と町並みの変遷について見てゆくことにしたい。

一・明治九年五月の石狩町大火の経過

明治九年の申奏録にある「石狩港火災ノ義上申」は、次のように明治九年大火を記述している。（注2）

石狩港火災ノ義上申

当使管下石狩国石狩郡石狩港親船町ヨリ本月九日午前八時出火シ家屋百「九」（加筆）拾六戸板倉三拾三棟仮病院壹ヶ所延焼、人畜死傷

等無之候得共目下窮迫ノ者へハ成規ニ拠リ夫々救助取計候旨札幌本庁ヨリ電報有之候条、此段上申仕候也

開拓長官黒田清隆代理

明治九年五月十五日

開拓中判官西村貞陽

太政大臣三条実美殿

石狩郡石狩港親船町から明治九年五月九日午前八時に火災し、家屋百九十六戸、板倉三十三棟、仮病院が焼失した。住民や家畜に死傷はなかったが、焼け出された罹災者には、規則に従って救援活動を行っている」と札幌本庁から電報により報告があったという内容である。

『石狩町誌』などもこの記事に沿った内容となっている。しかし、札幌本庁から提出された大火の報告書「石狩町焼失之顛末御届」（注3）は、これとは少し異なった内容になっている。

石狩町焼失之顛末御届

本月八日午後九時石狩市街失火之報知有之不取敢電信ヲ以御届申上候通即刻出張取調候処別書手續書之通分署官倉ヲ除ク之外戸数凡百九十六板蔵三十三病院本陣トモ延焼イタシ幸モ人畜死傷ハ無之候へ共非常之大火災目下困難飢饉之患難免状態ニ付不差置賑恤規則第六條ニ拠リ夫々救助取計昨九日午後三時帰札仕候此段御届仕候也

明治九年五月十日

札幌在勤

開拓大判官松本十郎

開拓長官黒田清隆殿

五月八日午後八時、開拓使札幌本庁に石狩が火災に見舞われているとの連絡があり、とりあえず電報で報告したように、即刻石狩に急行した。別紙の手續書にあるように石狩分署や官倉を除き家屋百九十六

戸、板蔵三十三棟、病院、本陣が焼失した。幸いにも人畜の死者損害はなかったが、大火災であり食料にも事欠く状態になったため、開拓使の賑恤規則第六条に沿って罹災者の救援を行った。その後、札幌には九日午後三時に帰着した。

この「焼失之顛末」に付属する「石狩失火取調之手續」では、さらに詳しい経過が記されている。それによれば、出火したのは七日の午後十一時頃で親船町の亀石熊五郎の家からであった。

石狩では折から鯨漁の時期で、町には高齢者、女性、子供しか残っておらず、十分な消火活動ができなかった。そのため火は三日間にわたって燃え続け、鎮火したのは九日の午前三時頃であった。札幌本庁の松本十郎のもとには、八日午後八時頃「石狩市街が九分どおり焼失した」と連絡が入った。それからすぐに巡査を連れて石狩に急行したのは「焼失之顛末」にあるとおりである。

さて、前出の申奏録と開拓使公文録の記述を比べて、最も大きな違いは、火災の日付である。申奏録では火災は五月九日となっている。しかし、開拓使公文録によれば、札幌本庁に通報があったのは八日夜、出火したのは七日深夜である。いったい申奏録が「本日九日午前八時出火」となったのはなぜだろうか。

「焼失之顛末」では、開拓大判官松本十郎は、石狩町大火の通報を受けて、とりあえず東京出張所に電報で報告をした（「不取敢電信ヲ以御届申上候」となっている）。

開拓使の電信記録によれば、札幌本庁から東京出張所への電報による報告は、二回にわたって行われている。（注4）

第一報は、石狩町に大火が起ったことを伝えるもので、札幌の松本大判官から東京の黒田長官に宛て、九日午前七時四十五分に発信されている。電報本文は、略号を用いているが、これを漢字に置き換えると次のようになる。

「本日午前八時石狩親船町ヨリ失火九分通り焼ケル即刻下官出張委細ハ郵便ニテ」

「焼失之顛末」にある「不取敢電信ヲ以御届申上候」というのは、この電報を指すのだろう。しかし、発信された九日朝には松本十郎は石狩に滞在していたはずである。おそらく松本十郎は、石狩に出発する八日夜に発信の指示をしたのであろうが、それが何らかの理由で、翌朝になってしまったのだろう。

この第一報が東京に着信したのは、発信から五日目の五月十四日である。電信としては、はなはだ遅いが、これは当時津軽海峡の電信線が不通になっていたためである。

本州と北海道を結ぶ電信線の整備は、明治五年から始まり、明治八年には札幌東京間が開通した。しかし、明治九年三月から津軽海峡の海底線が不通になり、復旧したのは明治十年七月であった。その間、電報は、函館青森間を郵送され、青森から再び東京に発信されていた。（注5）函館から青森まで順調にゆけば一日程度で中継できたようであるが、このときは何らかの原因で時間がかかったとみられる。

さて、第一報には「本日午前八時」とあるのだが、東京出張所では電報が九日に発信されていることから「本日」を九日のことだと解釈したのであろう。しかし午前七時四十五分に発信された電報で「本日午前八時」というのはおかしい。あるいは札幌に通報のあった時刻の午後八時と間違えたのであろうか。

続いて第二報は、九日午後五時二十五分に発信され、これも五月十四日に着信している。

「本日午前三時、石狩到着失火ヲ、取調タルニ市中家屋百九十六軒板倉三十三軒病院本陣類焼未タ着手并ニ私有地残ル死傷又無シ大火一同食料ニ困難即刻救助照準賑恤至急取計全テ鎮静済ミ午後三時目途相

立帰ル、此段上申委細ハ郵便ニテ」

この第二報では、具体的な被害が報告されている。冒頭に掲げた「石狩港火災ノ義上申」は、この電報を受けて、翌日の五月十五日に起案されたものと推定される。

第二報でも「本日午前三時到着」とあり、九日午前八時出火では辻褃が合わない。いったい東京出張所では、こうした矛盾のある日付をどのように理解したのだろうか。結局、太政官への報告は、第一報どおり出火を五月九日午前八時出火として起案され、それ以降、明治九年五月九日が定着することになった。

2. 区画整理の経緯

石狩町誌下巻は、明治九年五月の区画整理について、この火災がきっかけとなったとし、大火との関係を描いている。それではその経緯はどのようなものであったのだろうか。

明治九年五月十五日から十八日にかけて、東京出張所と札幌本庁の間に次のようなやり取りがあった。(注6)

まず、五月十五日に東京出張所の安田、調所連名で松本宛に電報が打たれている。

札幌 東京
松本 安田

調所

「石狩国失火ノキワ区画ノ体裁ヲ札幌ノ姿ニ照準ナルタケ改正スベキ旨長官指令アリ右ニテアレ委細ハ近日鈴木大亮現地着ノ上照会スベシ」

さて、この電報に対し、五月十八日、札幌本庁の松本十郎は、東京

の安田定則に次のように返信している

東京 札幌
安田 松本

「石狩失火ニ付区画改正ノ義承諾当方ニテモ既ニ取調中ニ付近テ可申進」

東京の安田とは、安田定則開拓使少判官、調所とは、調所広丈札幌農学校校長のことである。ちなみに開拓長官の黒田清隆は、五月五日から六月十二日まで伊豆に滞在しており、東京には居なかつた。(注7) 先の申奏録の起案者が「開拓長官黒田清隆代理開拓中判官西村貞陽」となっているのは、その為である。

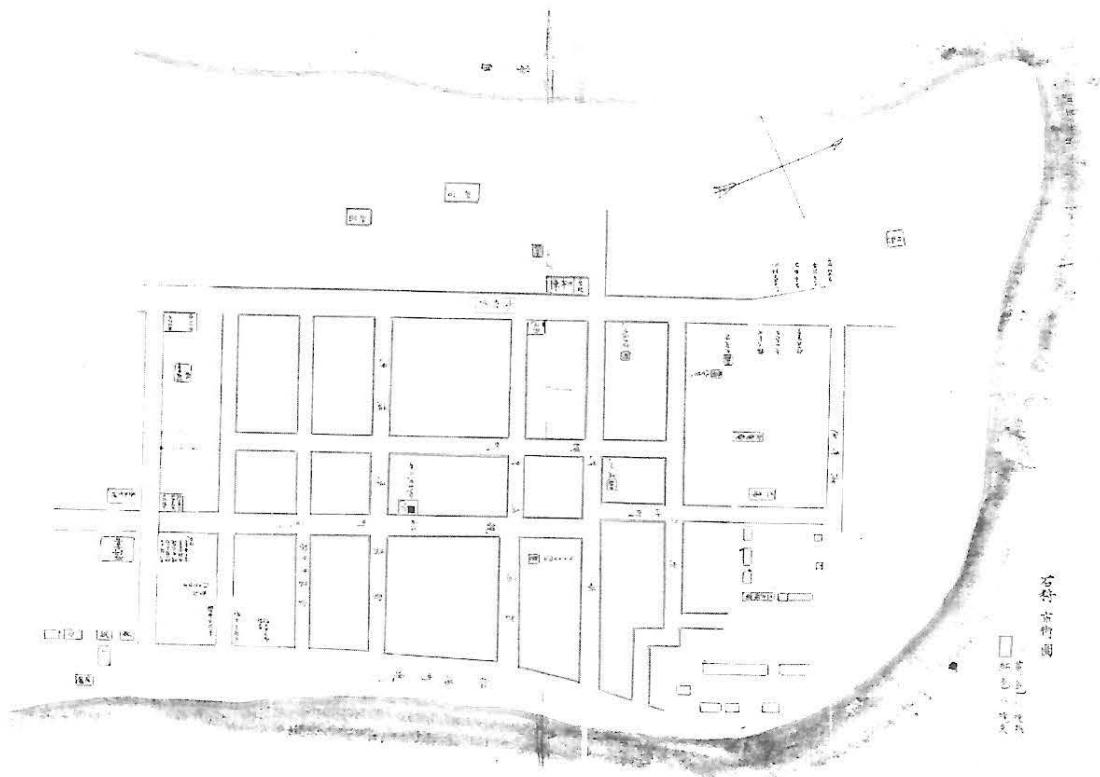
先に紹介したように札幌から電信による第一報が届いたのが五月十四日で申奏録の「石狩港火災ノ義上申」の起案が十五日である。大火の報告を受け、太政大臣に報告すると同時に、区画整理を指示したことになる。

おそらく、黒田清隆には、石狩市街の区画整理について、以前から関心があったのだろう。また、札幌本庁からの返信に「当方ニテモ既ニ」とあるように、札幌でも石狩市街の区画整理の必要性を認識していたと考えられる。石狩市街の区画整理は、黒田長官個人だけでなく、開拓使全体の関心事でもあったと言ってもよいだろう。

それでは、石狩市街には、区画整理を必要とするどのような問題があったのだろうか。

明治九年石狩町大火から二年後に起こった函館大火の際、鈴木大亮書記官は、黒田長官の発言を紹介する形で、次のように問題点を指摘している。(注8)

函館市街ノ形勢タルヤ道路狭隘ニシテ家屋相薄ナリ、此市街ヲシテ



石狩市街図

延焼スル勿ラシメンヲ欲シ其術ヲ求ムル豈得ヘケンヤ、抑港ハ其メ道路ヲ測理シテ地図ヲ量定セシモノニ非ズ、移住スル者ノ自ラ撰ブニ任セ自然ニ街衛ヲ為シ漸次現今繁盛ヲ致シタルモノナレバ、道路家屋ノ格構屈曲粗密犬牙錯雜固ヨリ定規ナシ、一朝火災ノ変アルニ当テハ消防術ナク瞬間数町ニ延焼シ、動スレバ今回ノ如災害ヲ来シ、祖先ノ恩恵ト畢生ノ努力トニ因テ蓄積セシ財産モ一朝ノ火災ニ蕩然跡ナク遂イ凍餓ニ堪エサルナリ

石狩など近世から形成された道内の街の多くは、海岸沿いの細く狭い土地に形成され、明確な都市計画もなく自然発生的に発展した。函館について指摘されたこれらの問題は、石狩市街にもそっくりあてはまるものであつたらう。

これに対し、区画整理の「照準」とされた札幌市街は、幕末まではとんど人の住んでいなかった場所に人工的に造られた街である。明治九年当時、札幌には統一された道路幅をもち、直線的で碁盤の目の街区が形成されていた。札幌、旭川、帯広などに代表されるこうした都市計画が何に由来するのか議論はあるが、開拓使は新しく建設する都市はもろろん、明治以前からの市街にもこのような都市計画を適用しようとしていた。実際に明治十年に根室、明治十一年に浦河が区画整理を実施している。また、小樽も明治十二年の大火後に区画整理が行われている。

ただ、区画整理の内容は、各地によって差があつた。函館では、道路幅の拡幅、区画の直角化のほか、防火帯や公園の設置が検討された。これに対し、石狩市街の区画改正では、防火帯や公園の設置が行われた形跡はない。石狩市街の区画整理は、道路幅の統一と区画の直角化の二点に集約される形で進められたと考えられる。

3. 町並みの変遷

さて、それでは区画整理が行われる以前の町並みは、どのようなものであったのだろうか。

先に紹介した「焼失之顛末」には、延焼範囲を示した「石狩市街図」と題された図が添付されている。この図は、焼失範囲を朱色で示し、主な街路、街路名、施設、出火場所、焼失を免れた主な家屋を示している。明治九年大火で焼失する前の街区を知る貴重な資料である。

この図の特徴は、①本町通を挟んで道路の不整合が見られること②本町通から河口側の街区が未発達であることの2点が上げられる。

①に上げた道路の不整合の典型的な部分は、親船通が本町通で止まっている点である。この図中で本町通を挟んで市街を貫いている道は、「旧本陣」と「教育所」が面している通りと金龍寺からまっすぐ続く道路（横町通）だけである。

旧本陣とは、現在の弁天歴史公園の場所にあった運上屋（元小屋）のことである。イシカリ改革の際に本陣と改められ、明治四年に廃止になったが、その後も駅通所として運営されていた。この通りは、運上屋から石狩八幡神社（かつては石狩弁天社があった）まで通じるもので、幕末の絵にも描かれている近世以来の道路である。それ以外の道路は、いずれも本町通で行き止まりとなっているのである。

その他にも現在と異なる部分はいくつもある。まず、旧本陣から渡船場へと向かう本町通は、現在の本町通と異なり、川までまっすぐ抜けてはいない。一旦左に折れ、更に右に曲がって渡船場に至っている。

これと同様の市街が描かれている図に北海道大学文学部附属図書館が所蔵する『石狩郡図（三番）』がある（注9）。

石狩郡図に描かれた本町市街でも、市街を貫いている道は、「休泊所」が面している海側の道路だけである。休泊所から川に向かう道は、本町通であろうが、これも現在の本町通と異なり、川までまっすぐ抜けてはいない。一旦左に折れ、更に右に曲がって渡船場に至っている。

弁天通に平行する街路が何本か描かれており、その中で弁天通に次いで長い通りが、現在の親船通だと考えられる。しかし、この親船通も本町通で行き止まりになっている。親船通と弁天通の間に通りはなく、現在の横町通は描かれていない。

石狩郡図の年代は、明確ではないが、本図と貼り合わされている石狩川河口から茨戸付近までの鮭漁場名と経営者及び凡その漁獲高を示した図の内容から、明治四年ないし五年の状況を示していると推定される。本町市街の図もそのころの状況が描かれているとすれば、先の「焼失之顛末」の付図とも矛盾しない。

さて、先に挙げた特徴は、何に起因するものであったのだろうか。筆者は、本町通を中心とした町並みと本町通り以南の町並みの形成時期の違いに由来するものではないかと考えている。

簡単に言えば、ある時期まで本町通から下流側のみに市街が形成され、上流側には、川沿いを除いてほとんど家屋がなかったのではないだろうか。本町通から上流側の市街は、本町通に家屋が立ち並び、町並みがほぼ完成した段階で形成された。そのため、本町通を挟んで上流側と下流側の街区に整合性が無いと推測されるのである。

明治時代の石狩市街については、河野常吉の残したいわゆる河野ノートに記述がある。（注10）

一、町名

本町、親舟町、舟場町、弁天町、石狩町、濱町

中町、横町、新町

（高嶋氏曰維新ノ始頃ハ本町、中町、新町、川縁アリシメント）

「高嶋氏」とは、明治二年に函館から兵部省文武方（武官）として石狩に赴任した高嶋甚五郎晴信のことである。この高嶋氏のこの発言をどのように解釈すればよいのだろうか。文字どおりに読めば、「維新の頃には、本町、中町、新町、川縁があった」となるであろう。し

かし、本町地区の八町の町名を上げた後に続けられていることを考えると、「本町……しかなかった」と解釈すべきではないだろうか。だとすれば明治二年ころは、本町通以南の街区がまだほとんど形成されていなかったことを裏付けることになる。

おそらく親船通を中心とした本町通から上流側の市街が発達しはじめたのは、高島が来た明治二年以降のことであろう。「石狩郡図」や「石狩市街図」は、そうした経過を示しているものと考えられる。

4. 「石狩市中地図」と「建家調」

区画整理を目的とする石狩市街の測量が、いつ行われたのかはつきりしないのだが、六月八日付けで、完成した測量図を回覧した文書が残されており、五月中に行われた可能性が高い。(注11) この文書には測量図が添付されていたらしいが、残念ながら筆者がこの文書を開覧した際には、付図を収めたとみられる袋はあったものの中に図はなかった。しかし、この付図ではないかと推定される「石狩市中地図」が、石狩市民図書館に所蔵されている。(注12)

この資料には、本町通りから南側の、ちょうど火災で焼失した範囲の街路が描かれている。図中には、「明治九年五月作成」と書き込まれており、「西村」「調所」「小牧」など当時東京出張所に在勤していた幹部職員の閲覧印がある。内容から見て明治九年五月の大火後に描かれた街路図であることは間違いない。

さて、それでは測量後の区画整理作業はどのように行われたのであろうか。その状況を伺わせるのが、札幌本庁地理課から石狩分署地理課に宛てられた次の資料である。(注13)

四十九 石狩市街区画更正調ニ付問合せノ件

上局 地理課

石狩分署 地理課

其地市街区画先般測定相成候処町幅ノ義ニ付長官殿御達ノ次第有之家屋満街ニ不至前更正可相成ノ御詮議モ有之候ニ付別紙略図へ朱線ヲ以更正ヲ記シ甲乙二葉送致候条右更正ニ付現今取建ノ家屋ヲ動シ候分何軒并右為動候ニ付手当等見積共御調査ノ上甲乙両様ニ御調分ケ御評議ノ都合モ有之候間極至急御差回相成度此段申進候也

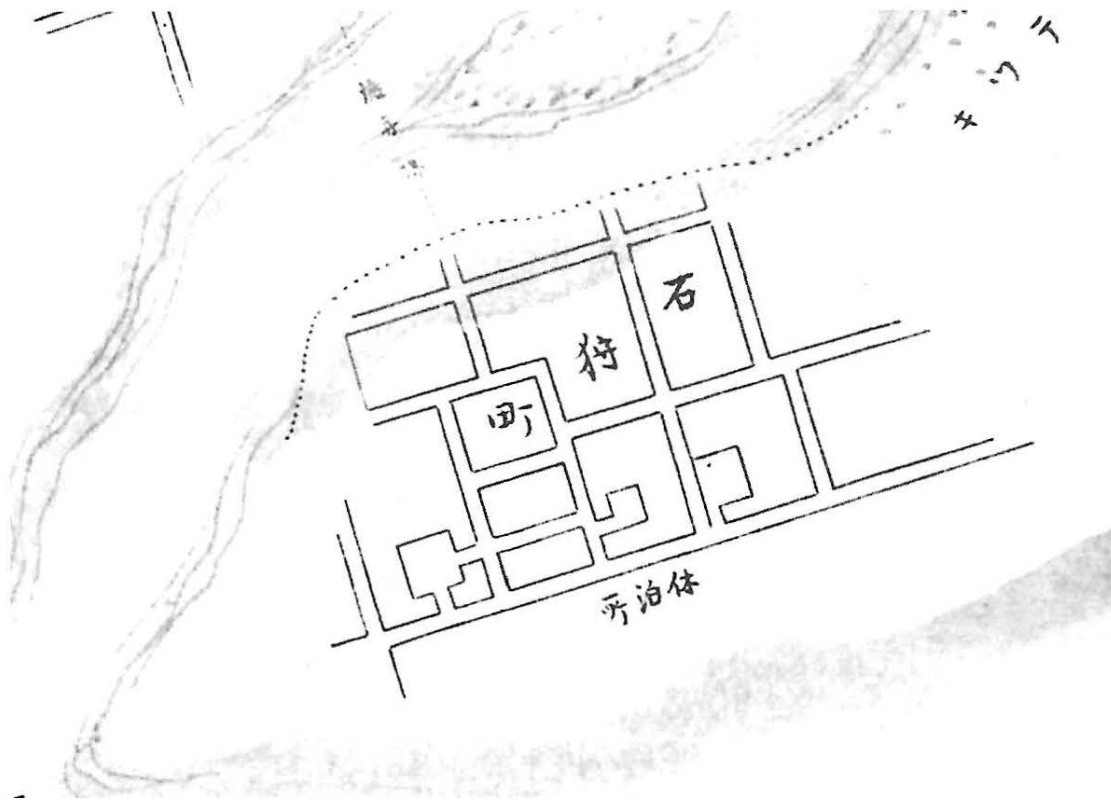
九年八月八日

石狩市街の区画については、先般測量が行われ、道路や街区の幅については、黒田長官から家が再建してしまう前に区画整理を進めるよう指示があった。については、図に区画整理を行う部分を赤線で示した図を甲乙二案作成するとともに、既に建てられてしまっている家屋の数、立ち退き補償費の見積もりを作成せよ。審議する都合もあるので、至急調査するように、という内容である。

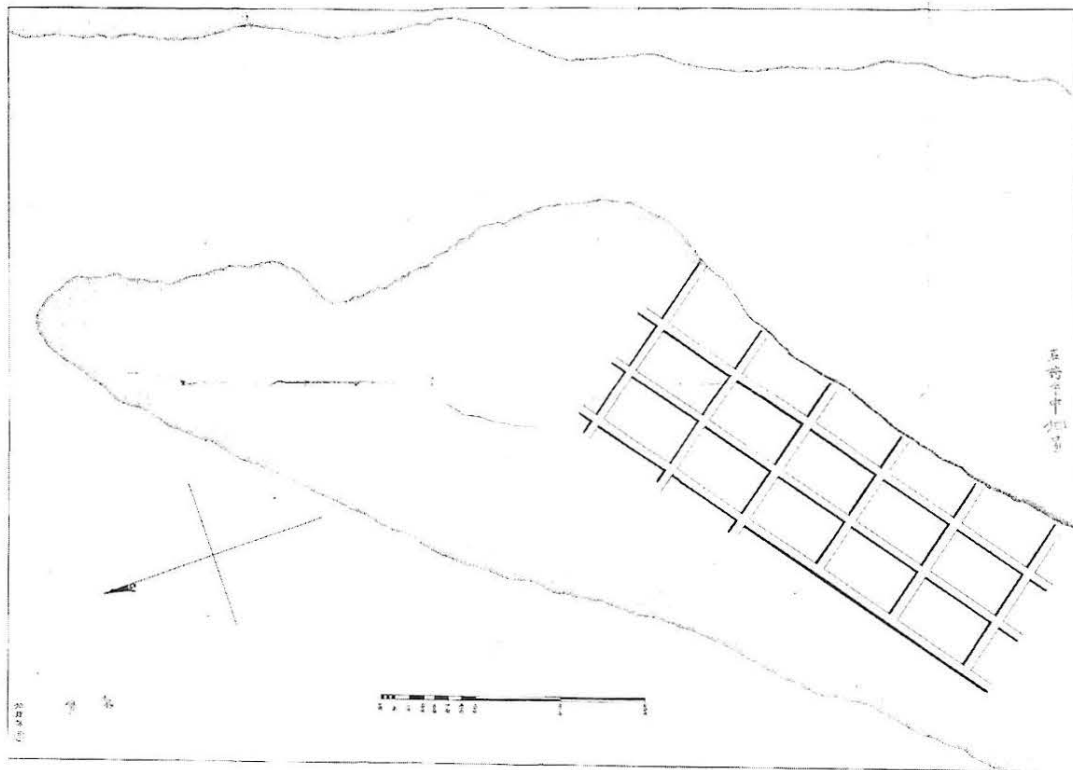
測量が行われたのが明治九年五月で、この文書はその3ヶ月後の八月である。五月の東京出張所との電報のやり取りでは、札幌本庁も石狩市街の区画整理に前向きに取り組むはずではなかったのだろうか。それが3ヶ月も経って区画整理計画を提出せよというのはどういうことか。

どうやら黒田長官の指示とは裏腹に、測量の実施後、現地の縄張りには、すぐには行われず、その間に家は次々と再建されていったと見られる。区画が現地に明示されていない状況で、家屋が再建されれば、区画からはみだすものが出るのは当然のなりゆきである。札幌本庁の指示に、再建された家屋の移転費、補償費の見積もりまで言及されているのは、そうした状況を感じ取っていたからであろう。

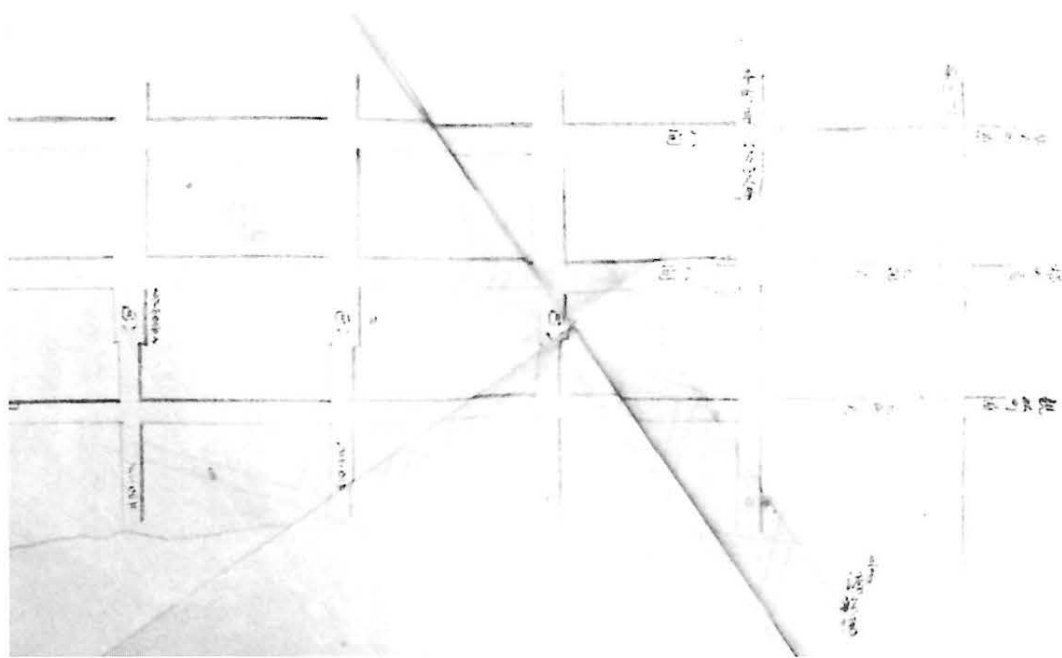
札幌本庁の指示を受け、石狩分署が行った建家調査の報告書は、「石狩市建家調」として八月十七日付けで作成されている。(注14)こ



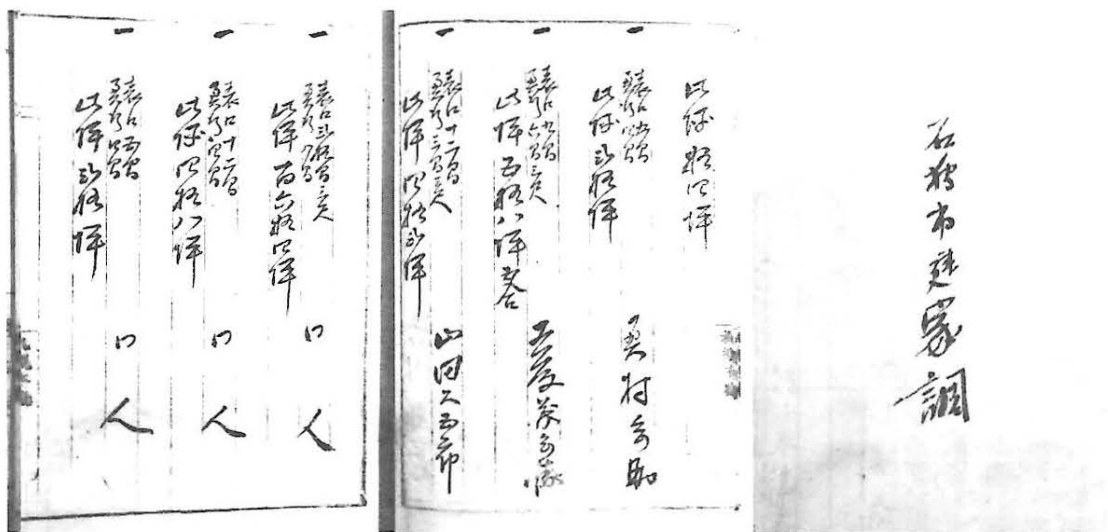
石狩郡図 (三番)



石狩市中地区



石狩市街地割改略図（部分）



石狩市建家調

の建家調によれば、建っている家は百五十七戸、建坪は十七万坪となっている。火災で焼失した家屋は、約二百軒であるから大火後三カ月でそれ以前のほぼ八割の家屋が、建られていたわけである。

五十 石狩市街幅員ノ義ニ付同分署へ照会ノ件

上局 地理課

地八ノ二十四号 本庁

石狩分署 地理課

其地市街区画更正一条ニ付建築落成候家屋取調ノ義申進候処ハ第十一号ヲ以取調御差回ニ付則上局ヨリ長官殿へ稟議ノ処既ニ家屋取建ノ分其俣ニ差置向後取掛候分ハ町幅取廣メ可申右幅員ハ八間之無候テハ往々差支可申旨御達ニ付御心得申進置候尤右ハ往々ノ御見込モ之有御差図モ之有候義ニ付尚上局へ相伺ヒ定夕出張ノ上実地ニ就キ及御協議候方可然哉ニ存候テ此段申進候也

九年八月廿二日

五十五 石狩市街幅員ノ義ニ付伺

上局 地理課

石狩市街焼失跡幅員更正ノ義長官殿御口達ノ次第モ有之候ニ付追々家屋取立候分相除キ未夕不取立分幅員八間ノ積ヲ以テ取調候処別紙画図面ノ姿ニ有之候就テハ取調ノ通家屋為取立可然哉画図面相副此段相伺候也

九年九月

絵図ハ六号付ニテ明治十年絵図入袋ニ入ル (朱筆)

石狩分署からの報告を受け、黒田長官に区画整理の障害となる家屋の取り扱いについて、伺いがたてられた。黒田の指示は、既に家屋が建っている場合は、そのままとするが、今後区画整理を行う部分は、道路幅を八間にせよというものであった。そこで石狩分署では、現況に合わせて、計画図の「石狩市街地割略図」を作成し、札幌本庁に確認を求めた。「石狩市街地区画割略図」を見ると、通りの幅は八間のほか六間、四間などさまざまである。

このように、九年大火をきっかけに意図された石狩市街の区画整理であったが、結局は不完全な状態で進められることとなった。

しかし、翌十年四月に再び起きた大火後にも同様に市街が測量され、区画整理が行われた。幕末から急速に形成された石狩市街は、幾度か繰り返される火災のたびごとに古い町並みを整理し、次第に我々が知る市街へと変わっていったのである。

おわりに

本稿では、開拓使公文録など開拓使文書から明治九年石狩町大火とその後に行われた区画整理の経緯をたどり、石狩市街の形成過程について考察を加えた。今回触れることはできなかったが、明治九年大火の罹災者には小屋掛料の支給が行われた(注15)ほか、漁民にも資金の貸与が行われた。(注16)罹災者に対する生活資金の貸与は、翌明治十年大火の際にも行われている。(注18)いずれも支給対象者の名簿が残っており、明治九年の建家調と合わせて分析することにより、明治初期の石狩町の住民像がより具体的に把握できると思われる。

今回の使用した諸資料は、一昨年から進めている石狩関係資料の所在確認調査のなかで、明らかにしたものである。今後は、こうした資料の一覧の作成、活字化、分析が必要になろう。

本稿は、平成二十年十一月二十日の石狩市郷土研究会例会での発表内容を整理、加筆したものである。この稿をまとめるにあたり、田中

實石狩市郷土研究会顧問及び村山耀一郷土研究会会長に様々なご助言をいただきましたことを深く感謝いたします。

注・参考文献

- 注1 石狩町 一九九九 『石狩町誌 下巻』
- 注2 北海道立文書館編 一九九二 『申奏録(二)』 北海道立文書館史料集第八
- 注3 「石狩町焼失顛末御届ノ件」『開拓使公文録 本庁上申』 北海道立文書館蔵・簿書五八四二
- 注4 『本庁電信留 明治八年』 北海道立文書館蔵・簿書一九〇四
- 注5 日本電信電話公社編 一九六四 『北海道の電信電話史』
- 注6 「四十五 石狩国失火ニ付区画正定ノ義電報往復」『明治十年編量地部書巻号』 北海道立文書館蔵・A4/三〇五、電報は「本庁電信留 明治八年」北海道立文書館蔵・簿書一九〇四に収録されている。本文は、略号まじりのカタカナで表記されており、読みやすくするため、適宜に漢字に置き換えて記載した。
- 注7 注2前掲書。「五月五日黒田長官熱海浴泉不在中中判官西村貞陽代理ノ件」及び「六月十二日黒田長官帰京ノ件」
- 注8 函館市 『函館市史 通説編一』
- 注9 「石狩郡図(三番)」北海道大学附属図書館蔵・図類二二三
- 注10 「石狩場所」北海道大学附属図書館蔵・別951、4、KON
- 注11 「石狩市街焼失跡区画改正測量ニ付き、画図面回致ノ件」『明治九年開拓使公文録 本庁往復』 北海道立文書館蔵・簿書五八三九
- 注12 縦三十五センチ、横四十三センチ。図の縮尺二千三百五十分の一。ゼロツクスコピ。
- 注13 「四十九 石狩市街区画更正調ニ付問合ノ件」
- 「五十 石狩市街幅員ノ義ニ付同分署へ照会」
- 「五十五 石狩市街幅員ノ義ニ付伺」
- 「量地部書 明治十年編 巻号」 北海道立文書館蔵・A4/三〇五
- 注14 「明治九年取採録 地理課」北海道立文書館蔵・簿書一五八〇
- 注15 「罹災ノ者小屋掛料并職具料貸付ノ儀ニ付上申」『明治九年開拓使公文録 本庁上申』 北海道立文書館蔵・簿書五八四二
- 注16 「石狩市街大火ニ付、漁民等罹災者へ小屋掛並ニ職具料貸与ノ件」『明治九年開拓使公文録 本庁伺』 北海道立文書館蔵・簿書五八四一
- 注17 「石狩市街失火ニ付罹災ノ者へ賑恤取計度義上申」『明治十年開拓使公文録 本庁上申』 北海道立文書館蔵・簿書五九六四

石狩尚古社社員

井上伝蔵と土方常吉、中島源五郎の俳句

鈴木トミエ

はじめに

明治期における石狩・厚田・浜益の俳句史は、村山家文書や石狩尚古社資料館の資料、石狩や厚田の神社、寺院に奉納された献灯俳句に因って知ることができる。さらに詳細を知るならば、当時の新聞を丹念に探っていくしかない。

そこで、明治期に発行された北海道毎日新聞、小樽新聞に掲載された俳句に関する記事を調査し、これまでに拙著『石狩・厚田・浜益歴史年表（明治21年～明治25年）』に「新聞に見る石狩の俳句」・「懸賞俳句」・「新聞に掲載された石狩の俳句」を、『同（明治26年～明治28年）』には「井上伝蔵と石狩青年会」・『同（明治29年）』に「俳句結社浜益風親社」・「石狩尚古社の俳句」・「浜益の俳句結社と抱月」をまとめた。

ここでは、明治31年12月31日までの北海道毎日新聞とほかの資料を加え、井上伝蔵と土方常吉、中島源五郎の俳句を探ってみた。

1. 井上伝蔵（俳号は柳蛙）の俳句

井上伝蔵（俳号は柳蛙）りゅうあ。石狩では伊藤房次郎といわれた）の俳句は、『尚古集』や神社・寺院の献灯俳句、石狩尚古社資料館の資料に残されており、研究者によって発表されている。井上伝蔵という人物についても、拙著の『新聞に見る石狩・厚田・浜益歴史年表（明治26年～明治28年）』で述べているので、ここではふれない。

すでに発表されている伝蔵の俳句をもう一度、年代別に列記し、さらに北海道毎日新聞に掲載された句を追加したい。ただし、新聞は前

述したように明治31年12月31日までを調査したもので、今後、また追加することになるだろう。

明治35年発行の『尚古集』に纏められた俳句以外の句と、それ以降の俳句は『井上伝蔵―秩父事件と俳句』（中嶋幸三著）、『井上伝蔵全作品』（同）によるところが多い。

また、ここでは石狩で詠まれた俳句のみを列記した。

明治25年

「高橋江雪君の初老を祝して」

扱ひも行届けり梅の宿

柳蛙

（伝蔵の長女吉村フミ所有の短冊）

明治26年

「高橋梅卜居士霊前に捧まつりて」

梅雨晴れや手向の水に立煙り

柳蛙

（『石狩俳壇誌』所収）

「石狩弁天社句合わせ」 木公庵箕山撰

汲上げる釣瓶手かなし初嵐

柳蛙

（『石狩俳壇誌』所収）

「石狩八幡社大祭奉額句・今秋季五題抜粹十六章」 硯巖庵松風撰

照り返寿夕日に暑し秋の蟬

柳蛙

（注・寿―す。石狩八幡神社の奉額）

（選者不明）

浴ミして端座を壊し初嵐

柳蛙

（注・浴ミ―ゆあみ。壊し―くずし。前川道寛所蔵の尚古社会員句帖）

「妻に先立たれし加藤有隣君のこころを汲みて」

思ひ出すこと皆悲し秋の暮

柳蛙

（『石狩俳壇誌』所収）

明治27年

柳蛙の俳句は見当たらない。

明治28年

「尚古社月並衆議評」 春秋庵主人みき雄撰
所作なくも礼儀慥や年男 柳蛙

(注・慥―たしか。石狩尚古社資料館資料)

明治29年

「尚古社文壇開」 三省堂有隣撰
煤掃て我家も広ふ思ひけり 柳蛙

(『石狩俳壇誌』所収)

「尚古社社員吟・情歌」

宵に勇んだ夕部の客も今朝は思案の胸算用 柳蛙

(『石狩俳壇誌』所収)

「石狩尚古社月並会」 木公庵箕山撰

養育は人もかくあれ雀の子 柳性

(ママ、注・柳蛙?。北海道毎日新聞明治29年5月付)

子寶の家やのきにも雀の子 柳性

(ママ、注・柳蛙?。北海道毎日新聞明治29年5月付)

「石狩梅卜翁追悼祭句合」 東京蜂庵採花撰
いつの間に小雨は晴れて朧月 柳蛙

(北海道毎日新聞明治29年8月付)

「石狩尚古社月並第十一回」 三省堂有隣撰
黄昏や蚊のむれ崩す通り雨 柳桂

(ママ、注・柳蛙?。北海道毎日新聞明治29年10月付)

「石狩尚古社月並発句」 三省堂有隣撰

庄屋との、行司振よし村相撲 柳蛙

(北海道毎日新聞明治29年12月付)

飛び入りの小男勇まし辻相撲 柳蛙

(北海道毎日新聞明治29年12月付)

勝相撲親の名までも褒問けり 柳蛙

(北海道毎日新聞明治29年12月付)

「石狩尚古社時雨忌並文壇納発句」 窓鶴庵露蕉撰
しくる、や渡場で聞くくれの鐘 柳蛙

(北海道毎日新聞明治29年12月付)

「石狩尚古社時雨忌並文壇納発句」 木公庵箕山撰

水鳥の月取巻てあそひけり 柳蛙

(北海道毎日新聞明治29年12月付)

水鳥や月より外に物もなき 柳蛙

(北海道毎日新聞明治29年12月付)

明治30年

「英照皇太后陛下追弔の意を捧表して」

御降りや仰し顔に一ト雫 柳蛙

(注・御降り―おさがり。佐藤セツ所有の短冊)

明治31年

「石狩尋常高等小学校校長源間友雄転勤による送別の句」

友立ていと、淋しや雪のくれ 柳蛙

(北海道毎日新聞明治31年2月付)

明治32年

「石狩尚古社臨時即吟会」

も、咲くや物に不足のなき構ひ 柳蛙

(『いしかり暦』第13号所収)

明治33、34年

柳蛙の俳句は見当たらない。

明治35年

「尚古社先亡会員十二名の追善句」

夜の空と思へぬ月の光かな

柳蛙

(『尚古集』所収)

松風に雲はらはしてけふの月

柳蛙

(『尚古集』所収)

〔尚古集社員吟・八幡神社奉納額〕
佛の眼にちらつくやたま祭

柳蛙

(注・佛―おもかけ。『尚古集』所収)

〔尚古社社員連句〕

盗まれし大角豆に垣の栓もなし

柳蛙

(注・大角豆―ささげ。『いしかり暦』第13号所収)

〔鎌田池菱記録の物故会員追善句〕

一声の跡は鴉やほととぎす

柳蛙

(『井上伝蔵―秩父事件と俳句』所収)

山路来て其日も過て不如帰

柳蛙

(『井上伝蔵―秩父事件と俳句』所収)

だしぬけに只一声や時鳥

柳蛙

(『井上伝蔵―秩父事件と俳句』所収)

千秋の思ひや花に雨一日

柳蛙

(『井上伝蔵―秩父事件と俳句』所収)

今暮る、まで鳥もきつ花の山

柳蛙

(『井上伝蔵―秩父事件と俳句』所収)

暮て散る花には風も一層よし

柳蛙

(『井上伝蔵―秩父事件と俳句』所収)

名月や軒に光りし蜘蛛の糸

柳蛙

(『井上伝蔵―秩父事件と俳句』所収)

夜の空と思へぬ月の光哉

柳蛙

(『井上伝蔵―秩父事件と俳句』所収)

松風に雲はらハしてとハの月

柳蛙

山里や日毎に替る雪の道

柳蛙

(『井上伝蔵―秩父事件と俳句』所収)

(選者はなし)

風もなき夜やしとと積る雪

柳蛙

(『井上伝蔵全作品』所収)

一ツ宛間のあるや雪の鐘

柳蛙

(注・宛―ずつ。『井上伝蔵全作品』所収)

明治36年

柳蛙の俳句は見当たらない。

明治37年

〔石狩尚古社文壇開〕 渡辺人也撰

浪なりに勿ねた侘なり小殿原

柳蛙

(注・勿ねた―はねた。『石狩俳壇誌』所収)

〔尚古社社員吟〕 渡辺人也撰

松も琴暫し止めて初日かな

柳蛙

(注・暫し―しばし。『井上伝蔵―秩父事件と俳句』所収)

〔石狩八幡神社奉燈句〕 渡辺人也撰

茸狩や柴にうたたる向脛

柳蛙

(『いしかり暦』第13号所収)

鹿鳴くや京は近して思はれず

柳蛙

(『いしかり暦』第13号所収)

刈り残す小村境の薄かな

柳蛙

(注・薄―すすき。『井上伝蔵―秩父事件と俳句』所収)

〔献灯俳句〕

菊つくるのも巧者なり薬ほり

柳蛙

(『石狩俳壇誌』所収)

山里の果報や昼も虫の声

柳蛙

年代不詳の俳句

(『石狩俳壇誌』所収)

「尚古社社員吟」 苔石撰

水に浮くちりも花なり吉野山

柳蛙

(『井上传蔵―秩父事件と俳句』所収)

「尚古社文壇開・情歌」 選者不明

長いお顔にみじかいお髭高い帽子に低い鼻

柳蛙

(『井上传蔵―秩父事件と俳句』所収)

「都々逸」 松山撰

名さへお福でお多福娘めたれが仕禍の福れ腹

柳蛙

(『井上传蔵―秩父事件と俳句』所収)

「短冊」

友去りてから暫して入梅ふかし

柳蛙

(『井上传蔵―秩父事件と俳句』所収)

日の恵みはるは氷も砕けとぶ

柳蛙

(『井上传蔵―秩父事件と俳句』所収)

隈もなく日の照る庭のすみれかな

柳蛙

(『井上传蔵―秩父事件と俳句』所収)

白菊の香を汲みて袖ぬらしけり

柳蛙

(『井上传蔵―秩父事件と俳句』所収)

「短冊―高橋翁の金婚を祝して」

たぐひなき千代の睦や梅柳

柳蛙

(『井上传蔵―秩父事件と俳句』所収)

明け空を見よとて鳴かん初がらす

柳蛙

(『井上传蔵全作品』所収)

吊したる菜にも程よき小春かな

柳蛙

(『井上传蔵全作品』所収)

白菊も野菊も萩も枯れはててひとりやさしき友も逝きたり

柳蛙

明治38/44年5月

柳蛙の俳句は見当たらない。

明治44年6月

井上传蔵一家は、石狩を去り札幌へ転居した。

井上传蔵は札幌で下宿業の石狩館を営業した。翌45年5月に札幌から野付牛(現在の北見市)へ転居。ここには、かつて石狩尚古社社員とともに俳句をつくり、石狩青年会の演説会でヤジを飛ばした仲間の土方常吉が待っていた。土方は、大正7年に伝蔵が死去したとき、葬儀委員長を引き受けている。

石狩尚古社の俳句活動は明治29年に引き続き、明治31年も活発である。明治30年の北海道毎日新聞は数枚しかマイクロフィルムに残っておらず石狩尚古社社員の動向が見えにくい。明治29年の新聞には柳蛙の俳句が掲載されているが、これは石狩尚古社の句会で詠んだ会員一同の俳句が、たまたま北海道毎日新聞に掲載されたためである。

当時、金道的に俳句が盛んになり俳句結社ができた。小樽新聞も北海道毎日新聞も俳句を募集し、それを選句して紙面に掲載した。けれど、井上传蔵はこれまで、個人的に投稿したことは一度もないように思われる。

さらに、明治31年には、これまでのように石狩尚古社の会員一同の俳句が紹介されているものの、そのなかには伝蔵の俳句はない。明治30年から31年にかけて、井上传蔵こと柳蛙の俳句はわずか2句。作句を休止したのだろうか。

蛇足になるが、明治29年8月、第7師団工兵・砲兵の大演習が石狩河口付近で行われた。当時の加藤一魯戸長が委員長となり歓迎準備委員会が結成され、町の有力者のほとんどが委員となつて準備がすすめられ師団の歓迎会を開催した。その準備委員には、有力者として認め

(『井上传蔵全作品』所収)

られなかったのか井上伝蔵の名前はない。

同年12月に、尚古社会員が海軍志願兵をおくる「送別俳句」を詠んだが、それにも参加していない。

伝蔵は、それより3年前の明治26年には、石狩青年会の演説会で「権利の種類」と題して演説。さらに同年、北海道から委託された農商務通信囑託者でもある。石狩の人々に受け入れられ、逃亡者という暗いイメージからは遠い。

そのような伝蔵であったが、前述したように戦争に結びつく権力者には敏感だったとも考えられないだろうか。

2・石狩・厚田・浜益の俳句結社と土方常吉（俳号は抱月）

土方常吉の俳号は抱月。抱月の俳句が初めて記録されたのは、明治29年7月の北海道毎日新聞によってである。当時、石狩尚古社の会員で、同年11月の新聞には浜益の俳句結社「風親社」の会員としても名前を連ねている。

また、厚田村の俳句結社「正風社」（結成年不明）の会員でもあり、明治34年に正風社から発行された『ちよの友』にも抱月の名がある。新聞に掲載された俳句は、明治31年12月までに調査されたものなので、今後も追加されるだろう。ほかに、明治41年に、正風社が厚田の常照寺や正眼寺に奉納した句額のなかにも、社員の一人とし抱月の名がある。

石狩在住時には、井上伝蔵と親交の深かった抱月。抱月は石狩、浜益、厚田との俳句結社と関わりをもち、北海道毎日新聞にも投稿したほど積極的な人物に思える。一方、伝蔵は石狩尚古社の句会だけにとどまり作句していたようだ。

石狩と厚田の俳句愛好者は、明治25年に石狩で発行された『山田露蕉古希之賀句集』に厚田神社の神主であった萩原泰能（俳号は大道）や漁家の佐藤辨蔵（俳号は茶辨）の俳句が掲載されているところから、

深い繋がりがあったことは推察される。

また、石狩尚古社の会員である井尻静蔵、上野正、畠山清太郎は、厚田村に漁場をもち漁業家として活躍していた。そのような状況から、石狩と厚田の俳句仲間には交流があり、さらに抱月を通して浜益とも交流があったことは、明治29年の新聞で初めて明らかにされたことである。

抱月は石狩に在住していた寄留人だったのか、職業や在住期間を知ることができない。

伝蔵の末娘佐藤セツの証言に「その人は北見に参りましたら時計屋さんを開いてまして、石狩でも一緒でした」とある。明治29年当時は、石狩に居住しながら浜益風親社の会員だったのだろう。

石狩から厚田へ転居し、その後に野付牛へ行っただけでも「梧桐会」（注・あおぎりかい）で俳句活動が続けた。生まれ故郷である愛知県丹羽郡犬山町から厚田に転居したのは明治40年4月。それまでの間、戸籍を移さず厚田でも寄留人として暮らしていたようだ。

野付牛に転入届けを出したのは明治45年2月である。伝蔵が野付牛に転居したのは45年5月、抱月こと土方常吉を頼りにして行ったと思える。

前述したように、土方常吉は井上伝蔵の葬儀委員長になるほど、親交が深かったのだ。

明治29年

石狩尚古社の会員としての俳句

「石狩尚古社月並発句集」 木公庵箕山撰
月落ちて鳴く声高かき蛙かな 抱月

雲低くき空に鳴き立つ蛙かな
（北海道毎日新聞明治29年7月付）
抱月

（北海道毎日新聞明治29年7月付）

接木して楽みの増す日口かな

抱月

(北海道毎日新聞明治29年7月付)

月低く蛙は高かく啼く夜かな

抱月

(北海道毎日新聞明治29年7月付)

〔石狩梅卜翁追悼祭句合〕 木公庵箕山撰

卯の花や暮かねて居る庭の面

抱月

(北海道毎日新聞明治29年8月付)

〔石狩尚古社月並発句〕 三省堂有隣撰

乞食も□ま□□日な□蓮の飯

抱月

(北海道毎日新聞明治29年12月付)

山雀や□□ふて行けは奥の院

抱月

(北海道毎日新聞明治29年12月付)

譲つりたる相撲綺麗な手際哉

抱月

(北海道毎日新聞明治29年12月付)

〔石狩尚古社時雨忌並文壇納発句〕 窓鶴庵露蕉撰

風呂吹や焚火に負て灯の暗

抱月

(北海道毎日新聞明治29年12月付)

〔石狩尚古社時雨忌並文壇納発句〕 木公庵箕山撰

水鳥や船を放れす近寄らす

抱月

(北海道毎日新聞明治29年12月付)

水鳥や軒まで届くしほ明り

抱月

(北海道毎日新聞明治29年12月付)

風呂吹や焚火に負て火の暗

抱月

(北海道毎日新聞明治29年12月付)

〔本社募集・十一月分句合披露〕 東京細鱗舎松江撰

姦ましきものは女そ大根ひき

石狩 抱月

(注・姦ましき―かしましき。北海道毎日新聞明治29年12月付)

〔本社募集・十一月分句合披露〕 西京鳳尾園撰

世の中や鴨の足にも隙のなき

石狩 抱月

(北海道毎日新聞明治29年12月付)

浜益風親社の会員としての俳句

〔浜益風親社月次集〕 東京其角堂機一撰

珍らしき嘶とりまく団扇哉

抱月

(北海道毎日新聞明治29年11月付)

藻花や風にま□せしさき所

抱月

(北海道毎日新聞明治29年11月付)

明治30年・31年

抱月の俳句は見当たらない。柳蛙と抱月はこの2年間、作句を休止

していたように思える。

明治34年

厚田の俳句結社「正風会」会員としての俳句

〔ちよの友〕に掲載された句 伊勢豊園耕雨撰

初鮭やアイヌの小屋に酒の樽

抱月

(『石狩俳壇誌』所収)

梅雨晴や弦かへて見る弓の癖

抱月

(『石狩俳壇誌』所収)

火まつりする咄あり群来鯨

抱月

(『石狩俳壇誌』所収)

低う来て雲のからまる芒かな

抱月

(注・芒―はなし。『石狩俳壇誌』所収)

腥き手に一と撮み木の芽かな

抱月

(注・腥き―なまぐさき。『石狩俳壇誌』所収)

洗い髪吹かせて居るや春の風

抱月

(『石狩俳壇誌』所収)

餅つきや湯気に埋て灯の闇き

抱月

切風を追ふや切下駄堤ながら

抱月
〔石狩俳壇誌〕所収

稲かりやはけむ手元を覗く月

抱月
〔石狩俳壇誌〕所収

伸るたけつほみ持けり葵はな

抱月
〔石狩俳壇誌〕所収

明治35年

石狩の俳句結社「尚古社」で発行の『尚古社集』に掲載された句
ちる花の法会や後も花盛

厚田 抱月
〔石狩俳壇誌〕所収

明治41年

「逸象選」(注・選者の逸象は俳画を嗜み、その絵は厚田の正眼寺に奉納された句額にある)

遠山も動く日和やいわし曳

抱月
〔石狩俳壇誌〕所収

明治41年に「常照寺へ奉納した句額」・「正眼寺へ奉納した句額」に、抱月の俳句があるが、まだ解説されていない。

3・生振「弥生社」社主、中島源五郎(俳号は桃下)の俳句

中島源五郎の俳句が初めて登場したのは、明治29年末の北海道毎日新聞「文苑」欄(『新聞に見る石狩・厚田・浜益歴史年表(明治29年)』参照)においてである。

明治29年

〔石狩尚古社時雨忌並文臺納発句〕 窓鶴庵露蕉撰

辻堂の鳥居そたかしかれをはな

桃下

(北海道毎日新聞明治29年12月付)

〔石狩尚古社時雨忌並文壇納発句〕 木公庵箕山撰
水鳥の機嫌に直る日和かな

桃下

(北海道毎日新聞明治29年12月付)

戻りにも時雨真向ふ野道哉

桃下

(北海道毎日新聞明治29年12月付)

〔鎌田池菱と尚古社〕(中島勝久著)によれば、桃下の本名は中島源五郎。元治元年福島県梁川町生まれ、士族。石狩郡生振尋常小学校の初代校長(注・明治29年12月19日仮始業30年2月14日開校式)であった。

33年12月に生振神社に奉納した句額には、生振村に入植した愛知県団員で結成された俳句結社「弥生社」の社主として桃下の名前がある。明治36年に石狩町花川村組合役場収入役。後に石狩を去り、大正7年の住所は勇払郡鶴川村大字鶴川となっている。

北海道毎日新聞「文苑」欄に掲載された俳句を抜粋すると

明治30年

〔本社募集・昨年八月月並発句集披露〕 室蘭幸能舎守雄撰
こぼる、もありて盛や萩の花

生振 桃下

(北海道毎日新聞明治31年2月付)

〔本社募集・昨年九月月並発句集披露〕 室蘭幸能舎守雄撰
淋しさは聲のみならず月の鹿

生振 桃下

(北海道毎日新聞明治31年2月付)

明治31年

〔石狩尚古社月並俳句〕 三省堂有隣撰

草崩^マや音もどかしき雨の降る

桃下

(ママ、注・草萌や?)。北海道毎日新聞明治31年5月付

桃下

香に立て夫と知られつ藪の梅
(注・夫―それ。北海道毎日新聞明治31年5月付)

桃下

〔本社募集・二月月並発句大角力披露〕 小樽夢庵墨雨撰
其のまゝに夜の明にけり朧月
(北海道毎日新聞明治31年5月付)

生振

〔本社募集・四月月並み発句披露〕 登別無心庵如雲撰
日の脚の急かぬ窓や暮れの春
(北海道毎日新聞明治31年6月付)

生振

野遊ひや高しと思ふ日の落る
(北海道毎日新聞明治31年6月付)

生振

〔石狩尚古社月並第四回目開卷〕 窓鶴庵露蕉撰
二ヶ國をかく鳴けり行々子
(北海道毎日新聞明治31年6月付)

桃下

木の間透く水の白さやあを嵐
(北海道毎日新聞明治31年6月付)

桃下

千代を經□松の根元や苔の花
(北海道毎日新聞明治31年6月付)

桃下

〔石狩尚古社月並第四回目開卷〕 三省堂有隣撰
木の間透く湖の白さよあを嵐
(北海道毎日新聞明治31年6月付)

桃下

行々子風もふくかと思ひけり
(北海道毎日新聞明治31年6月付)

桃下

築山の麓にもあり木したやみ
(北海道毎日新聞明治31年6月付)

桃下

〔本社募集・四月月並発句披露〕 登別無心庵如雲撰
月は稍おほろ氣失せて暮の春
(北海道毎日新聞明治31年6月付)

生振

(注・稍―やや。北海道毎日新聞明治31年6月付)

桃下

〔本社募集・五月月並発句披露〕 東京老鼠堂永機撰
宵の雨いよいよ梅雨と成に晝
(北海道毎日新聞明治31年7月付)

生振

〔本社募集・第十八回八月月並集披露〕 小樽暁園素行撰
葉隠れの南瓜見出しぬ隣の子
(北海道毎日新聞明治31年10月付)

生振

〔本社募集・第十九回九月月並余興披露〕 札幌對月園北水撰
名月の客と連れたつ門田かな
(北海道毎日新聞明治31年10月付)

生振

〔本社募集・第十九回九月月並集〕 東京私名庵虚吟撰
閨に月さしこむ影の廣さかな
(注・閨―ねや。北海道毎日新聞明治31年10月付)

生振

以上は、新聞によるものであるが、明治34年以降は『石狩俳壇誌』
に所収された桃下の俳句である。

桃下

明治34年

〔正風社〕発行の『ちよの友』に掲載された俳句伊勢豊園耕雨撰
医者一人乗せて吹雪の渡しか
(石狩俳壇誌) 所収

石狩

一人つ、初日おかむや船の窓
(石狩俳壇誌) 所収

石狩

畑打の鍬のか、やく朝日かな
(石狩俳壇誌) 所収

石狩

明治35年

〔尚古集〕に掲載された句
一人去りふたり去にして月寒し
(石狩俳壇誌) 所収

桃下

〔尚古集社員吟―連句のなかの一句〕

桃下

〔石狩俳壇誌〕所収

桃下

〔石狩俳壇誌〕所収

桃下

〔石狩俳壇誌〕所収

桃下

澗川を登る船唄かすかにて

桃下

〔注・澗—どろ。〕『石狩俳壇誌』所収

鴨上戸我かま、に這ふ

桃下

〔『石狩俳壇誌』所収〕

明治36年

『石狩俳壇誌』には桃下の俳句は見当たらない。

明治37年

〔石狩尚古社文壇開〕 渡辺人也撰

桃下

〔『石狩俳壇誌』所収〕

〔八幡神社奉燈俳句〕 渡辺人也撰

鹿の聲峯の嵐となりけり

桃下

〔『石狩俳壇誌』所収〕

〔献灯俳句〕 日本順之庵撰

塗りかえた神門まばゆし花の原

桃下

〔『石狩俳壇誌』所収〕

柴積た船にむしの鳴く夜かな

桃下

〔『石狩俳壇誌』所収〕

丸く居て皆真白なる月見かな

桃下

〔『石狩俳壇誌』所収〕

中島源五郎は、生振尋常小学校校長として赴任してから、石狩尚古社の会員となり活動にめざましいものがある。今後も新聞による調査を続けていく予定なので、俳句は追加されるだろう。『尚古集』は、尚古社の亡くなった12名の会員の大法要を記念して発行されたが、このときの追悼会臨時主任に中島源五郎（桃下）があたっている。

なお、明治37年まで、『石狩俳壇誌』に桃下の俳句はあるが、その後は見当たらない。

参考資料

〔小樽新聞〕小樽新聞社 明治30年～明治31年

〔北海道毎日新聞〕北海道毎日新聞社 明治30年～明治31年

〔石狩俳壇誌〕前川道寛 昭和60年 北海道教育社

〔井上伝蔵—秩父事件と俳句〕中嶋幸三 平成12年 邑書林

〔いしかり暦第13号—石狩尚古社資料館の資料から（中島勝久）〕

平成12年 石狩市郷土研究会

〔井上伝蔵全作品〕中嶋鬼谷（幸三）平成21年 自家版

追記

明治32年の北海道毎日新聞と小樽新聞を調査した結果、次のことが判明した。

1・井上伝蔵の俳句

〔石狩尚古社臨時即吟会抜粋〕登別無心庵如雲撰

雲に鳥入るや白帆のならば上 柳蛙

も、咲くや物に不足のなき構ひ 柳蛙

（北海道毎日新聞明治32年4月付）

〔雲に鳥……〕は、伝蔵の俳句として初めて発見された俳句である。

〔も、咲くや……〕、前述したように『いしかり暦』第13号に所収されており、すでに井上伝蔵研究をしておられる中嶋幸三氏によって公表されている。

2・土方常吉こと抱月の俳句

明治31年10月の北海道毎日新聞「文苑」欄に俳句結社「厚田蕉風社」

の俳句が掲載されており、会員のひとりとして名を連ねている。ちきれてはちきれては飛ぶ月の雲 抱月

（北海道毎日新聞明治32年10月付）

北海道毎日新聞社明治32年4月の投稿入選句には、在住名を厚田と記しているところから、31年ころ石狩から厚田へ転居したものとと思われる。32年11月には厚田在住として小樽新聞にも投稿している。

「図書にみる石狩鍋（サケなべ）材料の変換」によせて

鈴木トミエ 田中 實 秋山正子 高瀬たみ

仲野 孝 三島照子 安井澄子 吉本愛子

二〇〇八年三月、石狩市郷土研究会は石狩市民図書館において、「図書にみる石狩鍋（サケなべ）材料の変換」と題して、石狩鍋を紹介した冊子の展示会を行った。郷土研究会会員の田中實氏の膨大な資料のなかから、カラー写真で石狩鍋を紹介した冊子を数点選び、それをコピーして掲示板に貼った。展示会は好評であった。石狩市に在住するものにとって、自分の住む街の地名が付けられた鍋料理があることは誇りである。この鍋料理の美味しさを、ほかの人にもぜひ味わってもらいたいと、市の観光協会や料理店も力をいれている。

そのような盛り上がりのなかで、展示会が開催された。しかし、終わってしまえば、資料に基づいて考察した「石狩鍋の材料の変換」が忘れられてしまう。と、いうわけで、「いしかり暦」に掲載することにした。すでに述べたが、石狩鍋の紹介写真を時代の流れに沿って並べ、次にあげる表はその説明として掲示したものである。この表は、郷土研究会の女性会員によって作成され、後ろにその氏名を列記した。材料の変換は時代の流れを反映しており、表だけでは説明しきれないものもある。ここでは、興味深かったことを記したい。

石狩鍋の汁は、関西風の白味噌でも名古屋方面で使う赤味噌でもない。その中間、北海道で一般的に使われている「普通の味噌」である。味噌は味噌、出汁は昆布を使い生臭さをとるために生姜をいれたり、山椒を使ったりするのは料理人の好みによるものだろう。

1. 定番の具は大根・人参・こんにゃく・長ねぎ・豆腐・生椎茸
鍋のなかの具は時代を経ても、料理人が違っていても、生サケに大

根・人参・こんにゃく・長ねぎ・豆腐・生椎茸が定番である。

けれど発行年は確かでないが、一九六〇年代に『レディースクッキング7 鍋もの』では、サケの缶詰を使った石狩鍋を紹介している。現在では考えられないが、地方については運搬がいまのように充実しなかったから、生サケが高価だったのかもしれない。

二十九冊のうち、大根・人参が入っているものは十三冊、大根だけは二冊、人参だけは三冊であった。興味深いのは、石狩の料理店では大根・人参をいれないことだ。こんにゃく・しらたきが入った石狩鍋を紹介したのは二十二冊。長ねぎは二十五冊、豆腐は二十六冊、生椎茸は十五冊であった。

2. 石狩の料理店は大根・人参を入れない

二〇〇三年発行の「広報いしかり」で「石狩鍋を召し上げれ」を特集した。地元の料理店の「あいはら」・「金大亭」、民宿の「やまたま」で提供する石狩鍋には大根・人参をいれていない。石狩漁協女性部からの聞き取りや、郷土研究会の会員である吉岡玉吉さんが覚書とした調査のなかでも、石狩では石狩鍋に大根や人参を入れない。石狩にある(株)佐藤水産発行の『鮭・あきあじ』にも、それはない。

新鮮なサケを使えば、具の野菜はシンプルでも充分、美味しいということか。

家庭で食する場合は、秋の旬の野菜をいろいろ入れて楽しむものもいのだろうか。

3. ジャガイモを入れる？

家庭で食べる鍋物は、その家庭にあった野菜を入れていい。家庭の味を作って楽しむばいと思う。十年前、ジャガイモを入れていたと冊子は紹介するが、現在ではあまり利用しない。イモの種類にもよるが、汁にイモが溶けだして鍋にはむかないのではと思うが、それも好

みの問題で、使つてはいけないというものでもない。
 石狩鍋は、石狩漁場で食べられた本場の味にこだわりを、というのが地方史研究にたずさわっている者の願いであるのだが。

(文責・鈴木トミエ)

図書にみる石狩鍋(サケなべ) 材料の変換

| 図書名・出版社・発行年 | 石狩鍋の材料 |
|---|--|
| 『レディース クッキング7 鍋もの』(株)国際情報社 1960年代?の発行 | サケの缶詰 ゴボウ大根 こんにやく 豆腐 さやえんどう人参 生椎茸 白菜 |
| 『カラークッキング第三巻 魚料理』 (株)主婦と生活社 1968年刊 | サケ こんにやく キヤベツ サケ頭とアラ大根 長ねぎ じゃがいも人参 生椎茸 ホウレン草 |
| 『日本の料理第三巻 秋の味』 (株)講談社 1975年刊 | サケ こんにやく 春菊 さやえんどう大根 長ねぎ 豆腐 玉ねぎ人参 生椎茸 |
| 『漁師直伝!魚の食べ方 40種 この魚にこの料理』 農山漁村文化協会 1977年刊 | サケ こんにやく 春菊 山菜大根 長ねぎ 豆腐人参 白菜 |
| 『郷土料理とおいしい旅1 北海道』 朝日新聞社 1984年刊 | サケ しらたき 春菊 ゴボウ 白子 長ねぎ 豆腐 竹のこ シメジ キヤベツ 白菜 |
| 『特選クッキングブックス10 酒の肴と鍋料理』 (株)世界文化社 1984年刊 | サケ こんにやく セリ ゴボウ サケのアラ大根 長ねぎ |
| 『札幌の食いまむかし』 北海道教育社 1984年刊 | サケ こんにやく 春菊 ゴボウ 白子大根 長ねぎ 豆腐人参 生椎茸 キヤベツ 白菜 |
| 『新・サケ料理』 北海道新聞社 1985年刊 | サケ こんにやく 春菊 フキ サケのアラ大根 長ねぎ 豆腐 ゆでうどん 生椎茸 じゃがいも えのきだけ |
| 『話題がはずむ鍋料理』 北海道新聞社 1985年刊 | サケ しらたき クレソン ゴボウ 白子大根 長ねぎ 豆腐 玉ねぎ人参 じゃがいも 白菜 |
| 『家庭で楽しめる、北海道の郷土料理』 北海道新聞社 1986年刊 | サケ こんにやく 春菊大根 長ねぎ 豆腐人参 生椎茸 白菜 |
| 『北海道の味』 (株)ドメス出版 1986年刊 | サケ こんにやく ホウレン草 ゴボウ 白子筋子大根 長ねぎ 豆腐人参 生椎茸 ササゲ 白菜 |

| 図書名・出版社・発行年 | 石狩鍋の材料 |
|--|---|
| 『聞き書北海道の食事』 農山漁村文化協会 1986年刊 | サケ こんにやく サケのアラ 豆腐具体的な材料名はなく秋野菜を入れるとある |
| 『ポケットブック サケ料理 いつまでもおいしく』 北海道新聞社 1989年刊 | サケ こんにやく 春菊大根 長ねぎ 豆腐人参 生椎茸 白菜 |
| 『ポケットブック あったか鍋料理』 北海道新聞社 1992年刊 | サケ 春菊 なめこ 白子 筋子大根 長ねぎ 豆腐 玉ねぎ人参 生椎茸 じゃがいも 白菜 |
| 『ポケットブック サケ料理』 北海道新聞社 1993年刊 | サケ こんにやく 筋子 長ねぎ 豆腐 玉ねぎ キヤベツ |
| 『ポケットブック 旬の味サケ料理』 北海道新聞社 1994年刊 | サケ 葛きり サケのアラ 白子 豆腐具体的な材料名はなく旬の野菜を入れるとある |
| 『秋味のおいしい食べ方』 (株)佐藤水産発行年不明 | サケ ほうれん草 長ねぎ 豆腐 玉ねぎ人参 生椎茸 じゃがいも えのきだけ |
| 『鮭・あきあじ』 (株)佐藤水産 1995年刊 | サケ こんにやく 長ねぎ 豆腐 玉ねぎ キヤベツ |
| 『ポケットブック あつあつ鍋紀行』 北海道新聞社 1996年刊 | サケ しらたき 春菊 サケのアラ大根 長ねぎ 豆腐人参 生椎茸 じゃがいも |
| 『秘伝・鮭の料理とその周辺』 石狩市郷土研究会資料 吉岡玉吉 1997年作成 | サケ こんにやく サケのアラ 長ねぎ 豆腐 玉ねぎ キヤベツ |
| 『漁師のおかみさんの絶品料理』 竹内書店新社 2000年刊 | サケ サケの頭 白子大根 長ねぎ 豆腐人参 白菜 |
| 『日本人の食卓 鍋千一夜』 日本放送出版協会 2003年刊 | サケ こんにやく 春菊 ゴボウ 長ねぎ 豆腐 玉ねぎ人参 生椎茸 じゃがいも 白菜 |
| 『石狩鍋』を召し上げれ 鮭鍋料理あいら 広報いしかり 石狩市 2003年発行 | サケ こんにやく 長ねぎ 豆腐 玉ねぎ キヤベツ |
| 『石狩鍋』を召し上げれ 石狩漁協女性部 広報いしかり 石狩市 2003年発行 | サケ こんにやく 長ねぎ 豆腐 玉ねぎ キヤベツ |
| 『石狩鍋』を召し上げれ 民宿やまたま 広報いしかり 石狩市 2003年発行 | サケ こんにやく ミツ葉 ゴボウ 長ねぎ 豆腐 玉ねぎ 生椎茸 白菜サケ こんにやく ミツ葉 ゴボウ 長ねぎ 豆腐 玉ねぎ 生椎茸 白菜 |

| 図書名・出版社・発行年 | 石狩鍋の材料 |
|---------------------------------------|--------------------------------|
| 「石狩鍋」を召し上げれ 金大亭 広報いしかり 石狩市 2003年発行 | サケ 春菊 長ねぎ 豆腐 玉ねぎ 生椎茸 キヤベツ |
| 『旬の地魚料理つくし』 (株)講談社 2005年刊 | サケ サケのアラ 白子 長ねぎ 豆腐 白菜 |
| 『北海道の昆布と鍋料理』 北海道漁業組合連合会発行年不明 | サケ こんにく 春菊 ゴボウ人參 生椎茸 じゃがいも 白菜 |
| 『北海道の秋鮭料理集』 北海道漁業組合連合会発行年不明 | サケ 春菊 ゴボウ サケのアラ大根 長ねぎ 豆腐 里いも人參 |

資料提供 石狩市郷土研究会 顧問 田中 實
 表作成 石狩市郷土研究会 秋山正子 鈴木トミエ 高瀬たみ
 仲野 孝 三島照子 安井澄子 吉本愛子

石狩浜、厚田浜の履物

吉岡玉吉

はじめに

昭和初期(一九二六年頃)から昭和十年(一九三五年)頃までの石狩本町地区や厚田(現在の厚田区)での履物はようやくゴム製品が出回り始め、海での作業もデンペン靴といわれるゴム靴がまれに用いられるようになった。しかしゴム製品を使用できる家はいわゆる金持で一般には下駄、藁草履が主流だった。本稿ではこの下駄、藁草履を取り上げ、当時の石狩、厚田の履物事情について述べてみたい。なおデンペン靴とはゴム靴の異名で、これは表面に澱粉のような白い粉がついていたことから付いた名前。またゴム靴の修理は石狩では親船町の空佐々木商店で行っていた。

石狩本町地区の下駄

船場町や親船町、新町、本町、仲町、横町の一部は土の道路であったが、横町、弁天町の道路は依然として砂道で子供らは素足で遊んでいたものである。近くに土石地は無く石狩川の若生側、渡船場の上の河畔から川土を磯舟で運び横町などの砂道に敷き詰めたものである。(川土は肌理が細かいのでヤマセが吹くと舞上がり目や口に入り目葉の世話になった。)

昭和初期ではそろそろゴム製品が出回り冬などはデンペン靴が子供達の間で履くようになったのが、春から秋にかけては下駄が主流であった。大人も小人も履いた下駄は差し歯下駄(足駄)もあった。駒下駄が主で下駄屋という専門店はなかったが、呉服店(㊦中島商店、㊧長野商店)の他、雑貨店(㊨堀部商店、㊩紺野商店、塚谷商店、オヤキヤ後藤商店など)で売っていた。主流はヤナギ製であるが、キリ製のもの

のであり、軽く履きやすく、柾目いくらと値段が付き高級品で旦那衆や女衆の外出用下駄であった。子供らは皆ヤナギ製の駒下駄で女の子は小さいころはガツパ(ぼっくり下駄)を履いた。

下駄は砂の上を歩く時には砂を搔いて安定しもっとも適した履物であった。春、雪が解けるのを待ち遠しく下駄を履いて外に飛び出したのである。前側の止め紐切れると鼻緒を親指に巻いて歩き、横側の紐が切れるとアンゾ(綿糸)で結んで歩いた。雨の日は足駄を履く、良家の子供もいたが、大方は駒下駄であった。

子供らは学校の帰り門を出るなり下駄を空に蹴り上げ地面に落ちて裏返しなら明日は雨、表だったら晴れと遊びながら往き来したものである。表での往き歩き、そして帰りはもっぱら下駄。学校内では藁草履、良いところの子はズック靴であった。下駄履きは堅い地面では、デンクリ返して(ひっくり返しえる)足首を痛めることもあるが、砂地では下駄に密着して歩きやすく怪我をすることはなかった。ちなみに「ズック」とはオランダ語で黄麻(つなそ)の繊維の太撚糸で地厚く手織りした織地。多くはインドから産出され、テント、靴、鞆、帆などに用いられた。

道路が凍りつく厳寒の季節になると下駄は惨めであったが、真冬の晴天のときなど大人は下駄の歯に金具の滑り止めを打って爪皮をつけて履いていた他、デンペン靴のお世話になっていた。何にしてもあこのころ(昭和十年以前)、石狩は下駄の似合う街だった。

下駄の種類

下駄は広辞苑によると「二枚の歯のある台木に三つの穴をあけ、鼻緒をすげた履物」とある。ちなみに下駄は古墳時代ごろから使用され草履とともに長い間日本の履物の主流だった。このため下駄に関する例えも多い。代表的なものに「下駄を預ける」、「下駄をはかせる」、「下駄をはく」など現在でも頻繁に使用されている。

そもそも下駄は、後で書く草履やわらじとともに鼻緒履物類（はなおはきものるい）と呼ばれる。起源は明らかでないが弥生時代には農作業に使用される田下駄があり、西暦5世紀代の古墳から連歯下駄に似た形態の石製模造品が出土していることから、少なくとも5世紀ごろにはこの形態の履物が存在したと考えられている。しかし当時はまだ一般的な履物ではなく儀礼あるいは権威の象徴として用いられたと考えられている。

下駄には7、8種類あった。例えば駒下駄（連歯下駄）、差し歯下駄、ぼっくり下駄、中ぐり下駄、一本歯下駄、花魁道中下駄、天反下駄などである。素材はヤマギリ、ホウ、キリなどが主であった。

駒下駄（連歯下駄） 東京を中心とした関東地方でこう呼ばれていた。もともと日常的下駄。表面に竹皮表を貼り周囲と歯に漆で絵柄を施した物。ちよつとした外出、訪問用にも用いられた。一木作り。

差し歯下駄 台の裏に溝を彫り、歯を差し込んだ物。高下駄または足駄と呼ばれる。表と鼻緒にビロードを使ったもの、歯の低い日和下駄、利休下駄と呼ばれる物もあった。この先にカバ（爪皮つまかわ）をつけ冬にも使用した。石狩、厚田では冬のこの種の下駄を使用した。

ぼっくり下駄


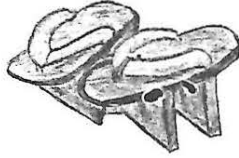
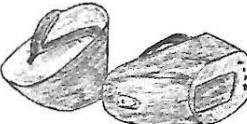

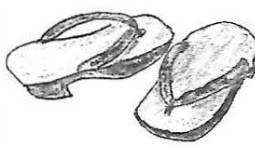
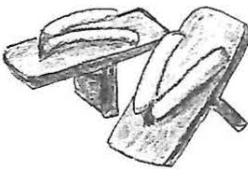


京都祇園の舞妓さんの正装時の下駄として有名。台の底をえぐった空洞が歩くたびに鳴るように工夫された下駄。本来は若い娘さん用の物。関西ではコッポリと呼んでいた。

この下駄も表面は竹皮打ちであるが、石狩、厚田では竹皮打ちではなく絵柄を施した幼児用下駄（昭和十一年ころ）。

中ぐり下駄

歯の代わりに台の裏を削り取ったもの。江戸時代は春慶塗りの台

下駄のいろいろ

| | | | |
|--|--|--|---|
| <p>駒下駄</p>  <p>石狩浜用</p> | <p>差し歯下駄</p>  | <p>ぼっくり下駄</p>  | <p>連歯下駄 (駒下駄)</p>  |
| <p>天反下駄</p>  | <p>一本歯下駄</p>  | <p>道中下駄</p>  | <p>中ぐり下駄</p>  |

吉岡玉吉 画

に竹皮表を鋏でとめ、ピロードの鼻緒をつけた。江戸時代末期では女性の外出用であったが、重すぎてだんだん履く人がなくなり昭和期には消滅した。

一本歯下駄

山岳信仰の修験者が使用した下駄。現在ではお祭りのとき天狗(猿田彦)が履く。厚い朴の木の歯を差した物。二枚歯のものもあり、これはバンカラの学生が履いた。朴歯下駄とも称し、応援団の必需品。なお足駄という呼び方もとも古いと考えられている。

花魁道中下駄(道中下駄)

花魁が顔見世行列の際に履く。三本歯の漆塗り、ピロード表。花魁はなぜか白粉をはいた裸足でこれを履く。

天反下駄(てんそりげた)

一見竹皮草履風だが、木製の台竹皮表を貼った下駄。この下駄は昭和初期に考案されたもので底を靴底に似せて独特のカーブをつけて歩きやすくした物。若者が外出のときよく履いたというが、石狩、厚田では見られず若者は雪駄を履いた。雪駄は「竹皮草履の裏に牛皮を貼り付けたもの。千利休の創意といい、また「世智駄」の意ともいう。のち踵に金物を付けた。」(広辞苑)。石狩、厚田で雪駄は裏にキルク(コルク)を貼った物が使用され、「キルク草履」ともいった。

厚田浜の藁草履

明治の後半から大正期、昭和の前期(昭和三十年ごろまで)まで石狩本町地区の漁家の一部(二十二軒)は三月上旬から六月下旬まで厚田の鯨漁場(主として鯨刺し網漁)に廻り船(磯舟)で出向くのが例年

の慣わしであった。厚田の浜は総べて玉石、岩石と砂利で下駄は不向きだった。四月の中ごろになると陽光眩しく足底も暖かくなり、子供らもズック靴やデンペン靴を脱ぎ素足同然で藁草履。大人も外仕事はゴム長靴から軽快な藁草履となる。

晩春とともに雑貨屋(田中商店、刃品田商店、池田商店、八島商店、高橋商店、近自転車屋など)の軒先に大人七銭、小人五銭と鼻緒を布きれと藁で編んだ藁草履が売られ鯨大漁の浜が一層活動的になったものである。浜の玉石原や岩石原、またガンケの坂道を歩くのこれ程、足に密着して歩きよいものはなかった。デンペン靴や地下足袋では足は疲れるがワラジ、草履は足に馴染んで気持ちよかった。

子供らは学校へはデンペン靴やズック靴を履いて行くが、帰ってくと親に言われなくとも藁草履に履き替えて遊びに出た。浜に出ても飛び石づたいにポンポンはねたり、岩石のところを走ったりしてもデングリ返ることはなかった。

小谷村(厚田区青島)に構える漁家の子供らは里程三キロ(現国道二三一号)通学するものであるが、往き来する風で天気の良い日は海岸を歩くのである。こんな時靴を脱いで藁草履に履き替えて玉石原をポンポン跳ねて通ったものである。

浜の雨降り以外の陸仕事は老若男女はもとより子供らも総べて藁草履の世話になった。藁草履は厚田浜に似合いの履物だった。

先に書いたように草履、わらじは下駄とともに鼻緒履物類の一つである。一説には草履、わらじ、下駄類は平安時代に確立したともいわれている。草履、わらじの起源は、中国大陸や朝鮮半島から渡ってきたという説もあり、この地域から伝わった植物繊維で編んだ草鞋(くさぐつ)をサンダル風の開放的な「わらじ」に改良したものともいう。

わらじ(草鞋)は底の周り五、六ヶ所から立ちあげた縄で足の甲やかかと、くるぶしに巻きつけて固定するものであるが、やがてシンブルな鼻緒に足の指を突っかけて履くだけのぞうりと成長して来た。物

理的に最も単純で安定した三ヶ所固定の鼻緒が生まれ、ひいては下駄になったという説もある。

江戸時代になって藁で編んだ草履は日常生活に欠かせない履物であったが、これが変化して竹皮の細紐で編んだ竹皮草履が出来、武士や商人へと普及した。

草履の種類

草履の種類には足半草履、かさね草履、雪駄(席駄)、裂地草履、縁取草履などがある。

このほかに裏に皮を貼った越中草履、寺町草履、麻裏草履など隠れたところに工夫を凝らした草履がある。またビロードや絹、ちりめんなどを使った贅沢な鼻緒を使い、革や錦を貼って凝った草履は寛延三(一七五〇)年の改革令で禁止されたが効果は無く、江戸大阪を中心に盛んだったという。

さて厚田で履かれた草履は、せいぜい麻裏草履程度で主体は藁に布切れで編んだ鼻緒の藁草履で石原やガンケ(崖)の上を走り廻った頃の藁で作った草履とのことである。

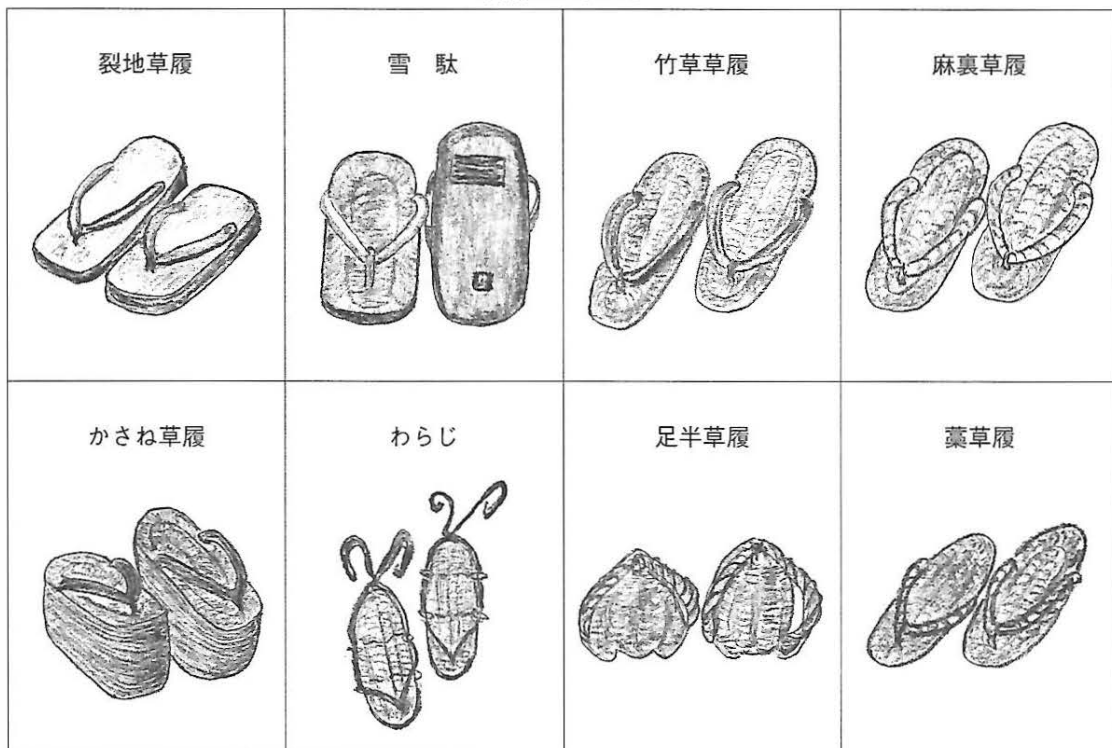
足半草履(そくはんぞうり)

荒縄の鼻緒で、藁で作った草履で踵部分がなく戦闘用に使用された。

かさね草履

竹の皮を編んだ台を三枚、五枚、八枚と重ね最上段にイゲサを編んだものをのせたもの。御殿女中や遊女の履いた。(現在のサンダルのようなもの)

草履のいろいろ



吉岡玉吉 画

雪駄（席駄）

台の裏に革を貼って地面の水気を防ぐようにしたもの。後に鉄片を踵のところに打ちつけるのが流行した。歩くたびにチャ、チャと鉄片の音のするのが粹だと大工の棟梁や若者、遊び人が競って履いた明治、大正、昭和初期まで履かれていた。

厚田や石狩浜で昭和二十年ごろまで裏がキルク（コルク）材ものが若者の間で履かれていた。

裂地草履

布きれで台を包み底にフェルトを貼ったもの。これに錦織を貼り、鼻緒も共切れの錦で作った。普通の人は履かず大家のおかみ、奥様クラスの盛装用だった。この履物は江戸時代にはなく明治、大正、昭和の初めの頃までであった。

縁取草履

ビロードや錦、柔らかい革で台の周りを縁取りしたもの。それが段々幅広くなって行き、さらに昂じて全体が革貼りになり大正から昭和初めころまでであった。

麻黄草履

麻糸の平打ちの組緒を渦巻にして裏につけた草履。昭和二十年代まで一般の、主に男子の若衆から中年まで履いた。単に「あさうら」ともいう。

おわりに

拙く履物談義をして来たが石狩浜に似合うのは素足に駒下駄であり、厚田浜には陽光眩しくなる五月初旬頃からよく似合う素足に藁草履であった。

今一度五月の中ごろ厚田漁のボンピラの丘（小石の浜、現夕陽が丘）を藁草履を履いて歩いてみたいものである。

広辞苑四版 一九九一年十一月 岩波書店 新村 出 編
靴の事典 二〇〇〇年五月 文園社 岸本 孝

北海道開拓記念館収蔵「イシカリ川借證文之事」

村山耀一

写書 イシカリ川借證文之事

私請負アツタ御場所秋味立船 差遣候処
 及御聞之通荒潤ニ而秋更積荷物氣遣敷
 奉存候ニ付従前々イシカリ御川拜借仕荷物
 之儀者場所より相廻積来候依之當年も御願
 申上候処御聞濟被下忝奉存候尤近年ニ到り
 千五百石立船川借相願候處去ル午年より出稼三ヶ処
 見込九百石依之式千四百石立船ニ相成候模様ニ寄り
 出稼所相止メ候節者近年相願候通千五百石立船
 川借相願可申候

一 近年度々洪水ニ而川欠出来川筋相狭り候ニ付
 是迄之振合与違永徳丸甚兵衛船壹艘川入仕
 同船八九分通積入候上ニ而雇船川入之約定
 仕候処相違無御座候明年之儀者只今より
 相心得居如何とも思召ニ随イ取計ひ可申候
 御川御法度之義者勿論御用人足御差圖
 次第相勤可申候猶又船繫場之儀者御勝手
 二相任せ綱引差支等ニ不相成趣舟中之者
 共江巖敷申付遣し候然上者魚壹本たりとも

イシカリ川借證文之事

私請負アツタ御場所秋味立船 差遣候処
 及御聞之通荒潤ニ而秋更積荷物氣遣敷
 奉存候ニ付従前々イシカリ御川拜借仕荷物
 之儀者場所より相廻積来候依之當年も御願
 申上候処御聞濟被下忝奉存候尤近年ニ到り
 千五百石立船川借相願候處去ル午年より出稼三ヶ処
 見込九百石依之式千四百石立船ニ相成候模様ニ寄り
 出稼所相止メ候節者近年相願候通千五百石立船
 川借相願可申候

蝦夷人江以相對賣買致候儀及御見聞候ハ、御存分之御取計ニ預リ可申候其節一言之儀申間敷候為後日連印一札差入候処如件

請負人

濱屋

与惣右衛門

永徳丸

枝ヶ崎町

素間尺四百三拾式石七斗七升

甚兵衛

中舞丸

小松前町

素間尺五百六拾壹石三斗九升

佐藤治

熱田丸

越後新潟

素間尺貳百五十式石四斗四升

林之助

八幡丸

越後新潟

素間尺貳百六十八石八斗三升

新八

栄寿丸

越後柏崎

素間尺三百三拾九石六斗式升

留蔵

丑

八月

御場所宿

工藤庄兵衛

阿部屋

傳次郎 殿

蝦夷人江以相對賣買致候儀及御見聞候ハ、御存分之御取計ニ預リ可申候其節一言之儀申間敷候為後日連印一札差入候処如件

濱屋

永徳丸

枝ヶ崎町

甚兵衛

中舞丸

小松前町

佐藤治

熱田丸

越後新潟

林之助

八幡丸

(現代語訳)

写し書 イシカリ川借り証文の事

私が請負うアツタ御場所へ秋味漁船を仕立て派遣したところ
お聞き及びの通り、アツタは海が荒(あら)い入江で、秋が深まると
さらに積み荷が心配で
ありますので、以前からイシカリの川をお借りしまして荷物を
アツタ場所より移動させてまいりました。こういうわけですから今年
もお願い

申し上げましたところ、お聞き入れて下さり有難く存じます。もつと
も近年になつて

千五百石の船を仕立て川を借用することをお願いいたしましたところ、
去る午年(弘化三年)より出稼ぎ場所三か所の

見込み九百石ですので、式千四百石の船を仕立てることに相成る模様
ですので、

出稼ぎ場所を終える時は、近年お願いしました通り千五百石船の仕立
てで、

川を借用することをお願い申し上げます。

一 近年度々の洪水にて川(石狩川)が決壊し川筋が狭まったために
是までのつり合いと違つて甚兵衛所持の永徳丸一艘を川入りいた
しました。

同船に八ノ九分通り積み入れいたしました上で、雇船川入りの契約を
致しましたことは間違ひございません、明年のことは今から

相心得ておりますが、どのようなお考えにもしたがいまして、取
計いたします。

御川(石狩川)のおきてについては勿論、ご作業の人夫のご指図
のあり次第勤めるようにいたします。そのうえまた船繋ぎ場につい
ては勝手

に任せたため綱引きに支障をきたすありさまのよう舟の中にい
る(水夫)者

共へ厳しく申し付け致しました。この上は魚(鮭)を一本であつ

ても
蝦夷人(アイヌ)に対し直接売買いたしたことを、見聞された時は、
ご満足ゆきますとおりのお取り計いをおまかせいたします。その
時は当方からは一言も申し
上げはいたしません。今後のため関係者の連印証文一通を差し入
れます。右に述べた通りでございます。

請負人

濱屋

与惣右衛門

永徳丸

枝ヶ崎町

甚兵衛

中舞丸

小松前町

佐藤治

熱田丸

越後新潟

林之助

八幡丸

越後新潟

新八

栄寿丸

越後柏崎

留蔵

素間尺

三百三拾九石六斗式升

留蔵

素間尺

三百三拾九石六斗式升

留蔵

丑
八月

御場所宿

工藤庄兵衛

阿部屋

傳次郎 殿

【解説】

この文書は濱屋与惣右衛門（濱屋与三右衛門のことと思われる）が請負っているアツタ場所所で鮭漁をしている雇船が、天候が悪化し海が荒れて入江に停泊できないため、石狩川河口より少し上流に避難し船を繋留させてほしいという願書で、同川を請負う村山伝次郎に提出したものの写しで（本来、写しは濱屋にあるもの）ある。石狩川に避難するには村山伝次郎への借用許可の願書が必要であった。

文書の日付は「丑 八月」となっている。年号が分からないが、嘉永六年（一八五三）年の八月か、慶応元年（一八六五）のどちらかのものと思われる。濱屋与惣右衛門がいつからアツタ場所を請負ったか定かでないが、村山家は安政四年（一八五七）の石狩改革により場所請負を免ぜられていることから、嘉永六年の文書の可能性が濃い。

この文書の書かれた期日であるが、当時は陰暦を用いていたため八月とは今でいう九月上旬から十月上旬ということになる。この頃は鮭漁も最盛期になる。厚田の天候も東南風から北西の風に変わりつつある頃である。北西の風は厚田ではタマカゼ又はタバカゼと呼ばれ、大波がおこり海は荒れ、漁師からも恐ろしがられている。そのため、海が風（なぎ）るまで安全な場所に避難する必要があった。小型の弁財船は嶺泊・押琴・古潭・厚田などの入江で風待ちができたようだが、文書にあるような大型の弁財船の場合は石狩川まで避難して風待ちをしなくてはならなかったようだ。石狩川はそれに適していたが、河口は波や潮流、川の流れが合体して危険な三角波が起きるため、河口より少し上流（船場町近く）に停泊し避難していたと考えられる。

文書の中に「近年度々洪水ニ而川欠出来川筋相狭り候二付……」とあるが、弘化二年（一八四五）には石狩川が氾濫して堤防が破壊されたため、村山伝次郎が越後から治水に長じた者十名を雇い、安政四年までかけて修築を行っている。（石狩川治水の始まり）

また、嘉永四年（一八五一）にも石狩川が氾濫して大洪水が起きて

いる記録がある。

このことから当時石狩川の洪水が頻発し川筋の状態が変化していることが分かる。

そのため、船の避難場所も制限があり、諸条件を話し合い調整して許可を得ていたようだ。

この文書の差出人はアツタ場所の請負人濱屋与惣右衛門（濱屋与三右衛門）は近江出身の松前商人であるが、松前の有力商人（塩越屋）工藤庄兵衛の連名で差し出されている。工藤庄兵衛は松前藩の家臣の待遇をうけており、嘉永六年（一八五三）には町年寄格に任ぜられている。

この文書にあるように借用する船繋ぎ場を借用するについては料金が掛ったのか、村山家の好意で無料でサービスしていたかは定かでない。しかし、石狩川を使用した場合におけるアイヌとの取引きは、鮭の売買を含め厳しく規制されていたようだ。

濱屋与惣右衛門（濱屋与三右衛門）の雇い船は文書内には五艘が記されているが、うち二艘は松前湊の船であり、後の三艘は越後新潟から来ていることがわかる。

濱屋与惣右衛門（濱屋与三右衛門）は箱館奉行の指令により厚田場所の安瀬と濃昼を結ぶ一〇・六キロメートルの山道開削を請負った。この工事は安政三年（一八五六）に開始され翌年七月、濃昼山道が完成している。濃昼山道の必要性については蝦夷地警衛の急な備えとして幕府が計画したものである。厚田―濃昼―浜益間の交通路は当時海上交通しかなく、悪天候で海が時化（しげ）た時はきわめて危険であったため、人や物資の輸送には険しい山道ではあったが有効であった。

《語句の意味》

数計算法

- 立船(たてぶね) || 船を出すこと 船を仕立てること
- 差遣(さしつかわす) || 派遣する
- 荒澗(あらま) || 波荒い入江
- 秋更(あきふけ) || 秋が深まる
- 氣遣敷(きづかわしき) || 心配だ 気がかりだ
- 従前々(まえまえより) || これまで 以前から
- 依之(これにより) || こういうわけで
- 聞濟(ききすまし) || 了承する 聞きいれる
- 忝奉存候(かたじけなくたてまつりぞんじそろう) || 大変ありがたく思います
- 到り(いたり) || および
- 午年(うまどし) || 弘化三年丙午 一八四六年のことか
- 振合(ふりあい) || 他と比較してのつり合い バランス
- 約定(やくじょう) || 契約 約束してとりきめること
- 思召(おぼしめし) || 相手の好意ある考え
- 随イ(したがい) || したがうこと 応ずること
- 次第(しだい) || 順次 だんだん 順序
- 差支(さしつかえ) || 支障 さしさわりがある
- 相對売買(あいたいばいばい) || 当事者間の一対一の売買
- 存分(ぞんぶん) || 思うまま 満足するほど
- 取計(とりはからい) || 判断してうまくおさめること
- 預り(あずかり) || まかせる
- 申間敷候(もうしまじくそろう) || 申し上げはいたしません
- 為後日(ごじつのため) || 今後のため
- 一札(いっさつ) || 一通の証文 一通の書付きつけ
- 如件(くだんのごとし) || 右に述べた通りである
- 素間尺(もとけんじゃく) || 松前藩での課税のための船舶の積石

石狩市(旧)の小・中学・高校校誌等略目録(未定稿)

田中 實 村山耀一

○現在の小学校

| 誌名 | 発行者 | 小学校名 | 発行年月日 | 判型 | 頁数 |
|------------------------------|-------------------|--------|-----------|---------|--------|
| 70周年祝賀記念誌 | 石狩国民学校70周年協賛会 | 石狩国民学校 | 昭20.1.31 | A5 | 42 |
| 創立100年 | 開校百周年記念誌編集委員会 | 石狩小学校 | 昭48.10.7 | 240×17 | 144十名簿 |
| 石狩小学校百拾周年記念誌 —心のふるさと石狩— | 開校百拾周年協賛会記念誌編集委員会 | 石狩小学校 | 昭58.11.27 | 235×245 | 87 |
| 創立120年記念誌 翔 | 創立百二十周年記念事業実行委員会 | 石狩小学校 | 平6.3 | 295×210 | 80 |
| 夢と笑顔で未来を築け | 石狩小学校開校130周年記念協賛会 | 石狩小学校 | 平15.11.16 | A4 | 49 |
| 開校百年 | 花川小学校百周年記念協賛会 | 花川小学校 | 昭48.6 | A5 | 106 |
| はなかわ 開校110周年記念誌 | 開校110周年記念事業協賛会 | 花川小学校 | 昭58.12.11 | B5 | 132 |
| 未来にはばたけ花小っ子 開校120周年記念親子文集 | 石狩町立花川小学校学芸指導部 | 花川小学校 | 平6.3.18 | B5 | 92 |
| 防風林 開校70周年記念 | 南線小学校七十周年記念事業協賛会 | 南線小学校 | 昭46.11.21 | A5 | 87 |
| 防風林 開校80周年記念 | 南線小学校八十周年記念事業協賛会 | 南線小学校 | 昭56.10.18 | A4 | 98 |
| 防風林 開校百周年記念誌 | 南線小学校百周年記念事業協賛会 | 南線小学校 | 平14.3.16 | A4 | 104 |
| 遊歩道 開校十周年記念誌 | 若葉小学校10周年記念事業協賛会 | 若葉小学校 | 昭61.12.7 | B5 | 53 |
| 遊歩道 開校二十周年記念誌 | 20周年記念事業協賛会 | 若葉小学校 | 平8.10.4 | B5 | 48 |

| 誌名 | 発行者 | 小学校名 | 発行年月日 | 判型 | 頁数 |
|---------------------|---------------------|--------|-----------------|---------|--------|
| はまなす 東小学校開校20周年記念誌 | 石狩東小学校開校20周年記念事業協賛会 | 石狩東小学校 | 昭47・7・2 | B5 | 60 |
| ひがし30 東小学校創立30周年記念誌 | 創立30周年記念祝賀事業協賛会 | 石狩東小学校 | 昭56・6・31 | 240×250 | 52名簿付 |
| 東の子 閉校記念誌 | 閉校記念事業実行委員会 | 石狩東小学校 | 平元・3・26 | A4 | 150 |
| (美登位小学校)沿革史 | 美登位小学校 | 美登位小学校 | 明治35年7 昭和42年 | B5 | コピー10枚 |

○閉校・統合校

| 誌名 | 発行者 | 小学校名 | 発行年月日 | 判型 | 頁数 |
|---------------|----------------------|--------|-----------|----|----|
| 遊歩道 開校三十周年記念誌 | 若葉小学校開校30周年記念事業実行委員会 | 若葉小学校 | 平19・3・15 | A4 | 44 |
| 輪 開校10周年記念誌 | 紅葉山小学校10周年記念協賛会 | 紅葉山小学校 | 平2・2・4 | B5 | 88 |
| 20 開校20周年記念誌 | 20周年記念協賛会 | 紅葉山小学校 | 平11・2・4 | B5 | 46 |
| 黎明 開校記念誌 | 花川小学校開校記念協賛会 | 花川南小学校 | 昭56・11・29 | B5 | 28 |
| みなみ 開校10周年記念誌 | 開校10周年記念協賛会 | 花川南小学校 | 平2・11・29 | B5 | 97 |
| 花南 開校20周年記念誌 | 開校20周年記念事業実行委員会 | 花川南小学校 | 平12・11・29 | B5 | 48 |
| こうなん 10周年記念資料 | 紅南小学校開校10周年記念事業協賛会 | 紅南小学校 | 昭59・10・7 | B5 | 65 |
| 紅南 20周年記念誌 | 紅南小学校開校10周年記念協賛会 | 紅南小学校 | 平16・10 | A4 | 54 |
| ふれあい | 生振小学校開校90周年特認記念事業協賛会 | 生振小学校 | 昭61・11・24 | B5 | 98 |
| 輝く未来へ100 | 100年事業協賛会 | 生振小学校 | 平8・11・17 | A4 | 71 |
| 八幡 | 八幡小学校開校10周年記念事業実行委員会 | 八幡小学校 | 平10 | B5 | 59 |

| 誌名 | 発行者 | 中学校名 | 発行年月日 | 判型 | 頁数 |
|--------------------------|---------------------|--------|------------|----|-----|
| 翔／いしずえ 石狩中学校開校10周年記念誌 | 開校十周年記念事業協賛会 | 石狩中学校 | 平成11・11・19 | B5 | 107 |
| 礎／いしずえ | 花川北中学校開校10周年記念事業協賛会 | 石狩北中学校 | 平成11・11・12 | B5 | 85 |
| 開校20周年記念誌 | 花川北中学校 | 花川北中学校 | 平成12年3月 | A4 | 47 |

○現在の中学校

(編著者注 上記のほかに、閉校・統合校は、発泉小学校・八の沢小学校・参線小学校がありますが、記念誌の発行は不明です)

| | | | | | |
|-------------------------------|-----------------------|----------------|----------|----|-----|
| 開校70周年記念誌 | 協賛会事務局 | 美登位小学校 | 昭45・8・16 | B5 | 26 |
| 開校80周年記念誌 | 美登位小学校開校80周年記念事業協賛会ほか | 美登位小学校 | 昭55・8・17 | B5 | 42 |
| 郷友 美登位小学校閉校記念誌 | 閉校記念事業実行委員会 | 美登位小学校 | 昭63・ | B5 | 113 |
| たかおかの歩み 高岡小80周年高岡中30周年(閉校) | 高岡小・中学校記念事業協賛会 | 高岡小学校 高岡中学校 | 昭55・3・20 | B5 | 120 |
| 道究 高岡小学校閉校記念誌 | 高岡小学校閉校記念事業実行委員会 | 高岡小学校 | 平成3 | B5 | 99 |
| たるかわ85 | 樽川小中学校開校85周年記念協賛会 | 樽川小学校 樽川中学校 | 昭47・9・15 | A5 | 114 |
| あしあと 開校65周年記念誌 | 五の沢小学校開校65周年記念協賛会 | 五の沢小学校 | 昭50・9・7 | B5 | 96 |
| あしあと 閉校記念誌 | 閉校事業実行委員会 | 五の沢小学校 | 昭57・3・ | B5 | 88 |
| あかだも 志美教育80年閉校記念誌 | 閉校記念事業実行委員会 | 志美小学校 | 昭53・3・21 | B5 | 96 |
| 古里の礎 志美小学校記念碑建立記念誌 | 志美小学校記念事業協賛会 | 志美小学校 | 平成3・3・ | B5 | 73 |

| | | | | | |
|--|----------------------|---------|----------|----|-----|
| 石狩南 ⁹² 北海道石狩南高等学校10周年記念誌 | 記念事業実行委員会 | 石狩南高等学校 | 平4・10・15 | B5 | 169 |
| 茨戸野 創立20周年記念誌 | 創立20周年記念事業協賛会 | 石狩高等学校 | 平9・10・5 | B5 | 126 |
| 石狩 創立10周年記念誌 | 北海道石狩高等学校創立10周年記念協賛会 | 石狩高等学校 | 昭61・10・5 | B5 | 105 |

○現在の北海道立高等学校

| | | | | | |
|----------------------|--------------------|-------|----------|---------|-----------|
| おやふる 生振中学校閉校記念誌 | 生振中学校閉校事業協賛会 | 生振中学校 | 昭55・3・22 | B5 | 142 |
| 創造 花川中学校40周年閉校記念誌 | 記念事業協賛会 | 花川中学校 | 昭62・3・ | B5 | 144 |
| 花中の30年 | 花川中学校開校30周年記念事業協賛会 | 花川中学校 | 昭52・10 | B5 | 48 |
| 聞け潮騒の北の海 | 石狩中学校閉校行事協賛会 | 石狩中学校 | 昭55・3・10 | 235×250 | 80 |
| 開校二十五周年記念誌 | 石狩中学校開校25周年記念行事協賛会 | 石狩中学校 | 昭47・9・1 | A5 | 108 ほか |

○閉校・統合校

| | | | | | |
|-----------------------------------|---------------------|--------|------------|----|-----|
| 開校十周年記念誌 | 花川中学校開校10周年記念事業協賛会 | 花川中学校 | 平8・11・17 | B5 | 182 |
| 開校二十周年記念誌 | 花川中学校開校20周年記念誌委員会 | 花川中学校 | 平成18・11・10 | A4 | 72 |
| 花川南 開校10周年記念誌 | 花川南中学校開校10周年記念事業協賛会 | 花川南中学校 | 昭62・10・4 | B5 | 174 |
| かなん 開校20周年記念誌 | 開校20周年記念事業協賛会 | 花川南中学校 | 平9 | B5 | 58 |
| 翔 10年の歩み 石狩市立樽川中学校開校10周年記念誌 | 石狩市立樽川中学校 | 樽川中学校 | 平16・10・8 | B5 | 41 |

石狩市(旧)の小・中学校唱歌(未定稿)

田中 實 村山耀一

○現在の小中学校

| 歌 別 | 学 校 名 | 作 詞 者 | 作 曲 者 | 制 定 年 月 | 歌 詞 (頭 出 し) |
|---------|--------|----------------|-------|------------|--------------|
| 校 歌 | 石狩小学校 | 飯田広太郎 | 工藤富次郎 | 昭和18年10月 | 石狩の流れゆたかに |
| 開校百年記念歌 | 石狩小学校 | 吉田繁雄 | 山口祐功 | 昭和48年 | 石狩の清き流れに |
| 水泳の歌 | 石狩小学校 | | | 大正4年11月 | 友よ衣をぬぎすてよ |
| 優勝の歌 | 石狩小学校 | | | 大正4年11月 | 石狩湾頭東風吹きて |
| 校旗の歌 | 石狩小学校 | | | | 燃ゆる赤地に雪模様 |
| 運動会の歌 | 石狩小学校 | | | (昭和15年以前) | 愉快なるかな空晴れて |
| 応援歌 | 石狩小学校 | | | (昭和15年以前) | 濁流怒る荒海に |
| 校 歌 | 花川小学校 | 深田利秋 | 伊藤清逸 | 昭和35年3月 | 千古の森をきりひらき |
| 百年賛歌 | 花川小学校 | 吉田繁雄 | 山口祐功 | 昭和48年 | おじいちゃんおばあちゃん |
| 校 歌 | 生振小学校 | 石井正造(校訂) 飯田広太郎 | 工藤富次郎 | 昭和5年 | 朝な夕なに仰ぐなる |
| 校 歌 | 生振小学校 | 菅原武夫 | 工藤富次郎 | 昭和35年歌詞を改定 | 朝風の匂うみどり野に |
| 校 歌 | 南線小学校 | 村岡幸正 | 千葉日出城 | 昭和32年 | 石狩の野のかぎろいの |
| 校 歌 | 南線小学校 | 吉田繁雄 | 山口祐功 | 昭和48年3月 | はまなす香る石狩浜に |
| 校 歌 | 若葉小学校 | 新井田清志 | 津野ツヤ | 昭和52年11月6日 | 開拓の歴史も古く |
| 校 歌 | 紅葉山小学校 | 横山 正 | 石山美治 | 昭和55年2月27日 | 手稲の山並み雲が飛び |

○閉校・統合校

| 校歌 | 開校85周年記念賛歌 | 校歌 | 校歌 | 校歌 |
|----------|-----------------|----------|--------------------|--------------|
| 石狩東小学校 | 樽川小中学校 | 樽川小中学校 | 志美小学校 | 石狩の緑あふれる広い野を |
| 西 忠義 | 生徒一同 添作 石坂英武 | 職員一同 | 原案 辻岡聖信 作詞 西 忠義 | 石狩の緑あふれる広い野を |
| 田中郁夫 | 生徒一同 添作 渡辺溝博 | 坂口和夫 | 石山美治 | 緑の地平に早苗はなびく |
| 昭和36年10月 | 昭和47年9月 | 昭和32年12月 | 昭和44年10月 | そよ風かおる樽川村 |
| | | | | あたらしいひかりをうけて |

| 校歌 | 校歌 | 花川南中学校開校讃歌 | 校歌 | 校歌 | 開校讃歌 | 開校10周年記念讃歌 | 校歌 〔踊りのある校歌〕 | 校歌 | 校歌 | 校歌 | 校歌 |
|-----------|------------|------------|---------|------------|-------|------------|----------------------------|------------|------------|-------------|--------------|
| 樽川中学校 | 花川南中学校 | 花川南中学校 | 花川中学校 | 花川北中学校 | 石狩中学校 | 石狩中学校 | 石狩中学校 | 八幡小学校 | 紅南小学校 | 花川南小学校 | 石狩の野に陽がのほり |
| 福井直之 | 桜井孝一郎 | 遠藤孝光 | 遠藤力雄 | 佐藤利雄 | 榎本哲史 | 近藤 恵(三年生) | 佐々木利雄 | 藤中彰一 | 奈良孝秋 | 同校父母と教師の会 | 石狩の野に陽がのほり |
| 上元芳男 | 山口治郎 | 大久保一考 | 高橋たい子 | 石山美治 | 木曾史子 | 小野島勇(校長) | 千葉日出城 | 石塚寿雄 | 伊藤文康 | 高橋達雄 | 石狩の野に陽がのほり |
| 平成7年10月7日 | 昭和53年12月3日 | 昭和53年2月15日 | 昭和63年2月 | 昭和56年1月26日 | | 平成元年 | 昭和54年4月旧石狩中の校歌を 継続使用に決定 | 平成元年12月21日 | 昭和60年9月25日 | 昭和56年11月29日 | 石狩の野に陽がのほり |
| | | | | | | | | | | | 石狩の野に陽がのほり |
| | | | | | | | | | | | 広く拓ける石狩に |
| | | | | | | | | | | | まぶしく光る三角屋根に |
| | | | | | | | | | | | 拓いた人の心を秘める |
| | | | | | | | | | | | はてしない空よ今日の日の |
| | | | | | | | | | | | 新たな友と手と手をつなぐ |
| | | | | | | | | | | | 大地拓ける石狩に |
| | | | | | | | | | | | 流れ豊かな石狩の |
| | | | | | | | | | | | おお拓け行く石狩の |
| | | | | | | | | | | | 紫そめる手稲の嶺に |
| | | | | | | | | | | | 命を守る石狩の |

| 歌 別 | 学校名 | 作 詞 者 | 作 曲 者 | 制 定 年 月 | 歌 詞 (頭 出 し) |
|--------|--------|-------|--------------------|----------------------------|-------------------------------------|
| 応援歌 | 石狩東小学校 | | | | (白)白くひかれしスタートに/ (赤)はまなす赤きグラウンドに/ |
| 校 歌 | 発泉小学校 | 斎藤 全 | 斎藤 全 | 制定年不明 斎藤氏は昭和23年 6月17日着任 | 青々と広牧場に牛の群れ/ |
| 校 歌 | 美登位小学校 | 塚本春夫 | 作曲 松尾 強 編曲 石山美治 | 昭和41年1月 | 石狩川の川すそに/ |
| 校 歌 | 五の沢小学校 | 福島音次郎 | 福島音次郎 | 昭和45年 | 校庭の緑の芝生はマツト/ |
| 校 歌 | 高岡小中学校 | 千葉宏平 | 三浦述而 | 昭和26年3月 | 阿蘇岩は旭にみちて/ |
| 校 歌 | 花川中学校 | 筒井秀武 | 筒井秀武 | 昭和28年8月 | 手稲遙けく雲裂けて/ |
| 校 歌 | 生振中学校 | 石川 徹 | 岡崎豊治 | 昭和52年4月 | 大いなる河とうとう滔々と/ |
| 運動会応援歌 | 若生小学校 | | | | 北斗の星の星座に集う/ |
| 凋落の歌 | 石狩中学校 | 合作 | | 昭和22年6月 | 春の光のゆらめきて/ |
| 薫風の歌 | 石狩中学校 | 合作 | | 昭和22年7月 | 手稲おろしの雪消えて/ |
| 応援歌 | 石狩中学校 | 森山多規雄 | 岩田昌敬 | 昭和29年6月 | 聞け潮騒の北の海/ |

いしかり曆 第二十二号

平成二十一年三月三十一日 印刷

平成二十一年三月三十一日 発行

発行者 石狩市郷土研究会

石狩市花川南五条二丁目一三一

村山耀一方

TEL 〇三三三二七二一七四八九